



日本イスパニヤ学会「会報」

Boletín de la Asociación Japonesa de Hispanistas

第 33 号 (2026 年 10 月 1 日) / Núm. 33 (1 de octubre de 2026)

日本イスパニヤ学会事務局

〒 170-0002 東京都豊島区巣鴨 1-24-1-4F
(株)ガリレオ 学会業務情報化センター内
Tel: 03-5981-9824 Fax: 03-5981-9852
e-mail: g004esp-mng@ml.gakkai.ne.jp
(<http://www.gakkai.ne.jp/ajh/>)

広報委員会「会報」編集部

〒 662-8501 西宮市上ヶ原一番町 1-155
関西学院大学人間福祉学部
村上 陽子 宛
e-mail: yokomura@kwansei.ac.jp

目 次

【巻頭言】

長谷川 信弥 この巻頭言は生成 AI を使っていません 3

【追悼】

寺崎 英樹 コントレラスさんをしのぶ 5

【エッセイ】

1. José Antonio Flores Farfán El trabajo de Linguapax en América Latina 7
2. Ana Isabel García Tesoro Lo que las lenguas indígenas nos enseñan sobre el español 9
3. 禪野 美帆 メキシコにおける「先住民」および「民族」意識の動態 10
4. 大越 翼 声のなかの歴史、文字のなかの音
—La Fátima から植民地期マヤ語文書へ— 12
5. 青砥 清一 パラグアイにおけるグアラニー語について 14
6. 武田 和久 グアラニー —その社会組織と文字文化— 16
7. 敦賀 公子 言語消滅の危機からの民族アイデンティティの復興
—国勢調査から考えるナワト・ピピルの人々の場合— 18
8. 福嶋 教隆 山田善郎先生の百歳のご長寿をことほぐ 20
9. 田林 洋一 劇団クセック ACT 最終公演「ドン・キホーテ」との出会い 22
10. 清水 憲男 言語哲学とキリスト教殉教史 24
11. 安達 直樹 canoa に次ぐアメリカニスモ: 辞書学的覚書 27
12. Erik Andrés Reynoso Márquez
Memoria y Linaje: La Digitalización del Archivo Histórico del Antiguo e Ilustre
Solar de Tejada 29

【書評】

1. 山村 ひろみ FUKUSHIMA, Noritaka(2025). *Modo y modalidad estudio contrastivo entre el japonés y el español*. Madrid, UAM Ediciones. 31
2. 片倉 充造 フアン・ルルフォ『黄金(おうごん)の軍鶏(しゃも)』
(1980 年、杉山 晃訳) 国書刊行会、2026 年 33
3. 中島 さやか Moyano López, Juan Carlos; Hiroyasu, Yoshimi; Yamaura, Ángela (2025). *La enseñanza del español en las universidades japonesas* (日本の大学におけるスペイン語教育). Observatorio Global del Español, Instituto Cervantes. 35

【著書・編著書紹介】

1. 田林 洋一 『スペイン語の認知言語学 —多面的かつ普遍的な認知言語学を目指して—』開拓社、2026 年 37
2. 片倉 充造、佐竹 謙一 (論集委員) 『ドン・キホーテとともに』行路社、2025 年 38

【学会等報告】

1. 三浦 知佐子 京都セルバンテス懇話会第 26 回全国・静岡大会 41
2. 喜多田 敏嵩 東京スペイン語学研究会 (CELHT) 2025年度活動報告 42
3. 岡 あゆみ 関西スペイン語学研究会 (CLHK) 2025年度活動報告 44
4. Carmen Belén García Bernal
Grupo de Investigación de la Didáctica del Español (GIDE)
Informe de las actividades (2025-2026) 45
5. 小川 雅美・柳田 玲奈
関西スペイン語教授法ワークショップ (TADESKA)
2025年度活動報告 47
6. 大楠 栄三 東京スペイン語文学研究会 2025年度研究報告 49
7. Carlos García Ruiz-Castillo
Confederación Académica Nipona, Española y Latinoamericana
(CANELA): informe de actividades de 2025 a 2026 50

【その他】

- 廣瀬 瞳 「高等学校スペイン語教育ネットワーク」設立の報告 53

【新刊案内】 2025 年 6 月～2026 年 5 月 55

【『HISPÁNICA』編集委員会より】 61

【編集後記】 61

【巻頭言】

この巻頭言は生成 AI を使っていません

長谷川 信弥

ワールドカップ決勝戦、どちらが勝ってもスペイン語圏の国が優勝するのは、第1回大会のウルグアイ対アルゼンチン以来のことだったそうだ。スペイン語圏の存在がクローズアップされたことを単純に喜んだ。さて、私のような、これまで学会への貢献のない者が会長に推され、不思議に思う、不満に思う学会員もいることかと思うが、どうかご容赦願いたい。日ごろ、授業の準備やゼミ生、院生の論文指導に追われ(これらのことには手を抜いていないはず)、研究がおろそかになり、学会で発表もせずに40年近くすごしてきたが、学会の移り変わり、すなわち学会員の入替わりだけは目にしてきたはずで、そのことで推されたのだろうかと思う。

さて、今号の記事にもあるように、元会長の山田善郎先生が百歳をお迎えになられ、個人的にたいへん感慨深い思いを抱いている。山田先生が大阪外国語大学の学長に就任される直前のイスパニア語史の授業を受けさせてもらい、その後、数年して山田先生のポストの後釜として、私はイスパニア語学科の助手として採用された。その私も来年度が最後の年で定年を迎える。

ところで、いま大学では生成 AI の活用について賛否両論、意見が分かれている。すこし前までは翻訳ソフトの利用について否定的な意見が多いながらも、学生の使用をとめることなどとうていできず、いまま野放しの状態が続いている。むしろ、これをチェックする実力をつけることを目指したほうが良いという考えで、翻訳ソフトを積極的に利用した授業をおこなっている先生もいる。が、生成 AI を使って課題やレポートを作成、あるいはゼミの発表をおこなう学生があたりまえのように出てきて、聞いたことのない文献がリストに並べられる始末で、その文献が実存するかどうかを生成 AI に尋ねている。失笑ものである。いまのところ、生成 AI は既存の情報をできるだけ広範囲に集めてくることには長けているようで、修士論文や博士論文でこれを使えば、これまで個人がチマチマと積み重ねてきた知見がいつも簡単に目の前に並べられ、先行研究の積みあがりにまったく労力を取られることなく、ムダな時間がなくなり、それに替わってさらに飛躍したアイデアが思いつきやすくなるのかもしれない。個人の限界を軽々と超えて、思いもつかない成果が得られるかもしれない。しかし、院生に自分を越える素晴らしい理論を出される指導教員は気が気でないかもしれない。心の狭い研究者の宿命である。とはいえ、語学教師としては、語学学習の本質は何も変わらず、つまり、ごく単純に外国語をおもしろいと感じる、自分の言語とはちがう言語にそこはかたない興味を抱くこと、こういったことはいつまでも自分のなかでは変わらない、と信じて定年までの授業をあと少し続けていこうと思っている。実に気楽なものである。

最後に、現在の学会の状況について一言述べさせていただく。1990年代、大学教員にな

りたてのころ、私は4年間、学会庶務委員を任せられた(理事ではなく、単なるボランティア)。そのころの会員は500名近くいたと記憶している。現在は300名あまりで、かなりサイズダウンした。あのころ、私の所属する大学はスペイン語の専攻課程(イスパニア語学科)の学生定員が75名(一部50名、二部25名)で、専任教員は11名(専任10名、ネイティブ1名)だった。統合によって大学名も変わり、2026年現在の学生定員は31名である。専任教員は6名(専任5名、ネイティブ1名)に半減した。学会の会員数も減ってきたのがうなずける。この数十年でスペイン語専攻の学生募集を停止した大学もある一方で、いわゆる第二外国語科目にスペイン語をはじめたところ、多くの学生が履修するようになったところもあり、新たに専任教員を置いた大学もある。しかし、少子化は確実なのだから、学会そのもののあり方について、何らかの方策を考えるべきときが来たように思う。味気ないかもしれないが、大会をすべてオンラインですれば、経費の節約は圧倒的である。やはり対面でなければ成果を得られにくいとなれば、オンライン化は隔年でも効果はあるかもしれない。来年度の大会開催校はすでに内定しているので、これは私の任期期間の話ではないことをお断りしておきますが。学会誌もオンライン化が爆発的に増えた。これもかなりの経費削減効果がある。HISPÁNICAも創刊号からPDF化されている。経費のことばかり言わなくても、実際のところ、文献を探しましょうと促しても図書館に行く学生はいなくなり、みんなネット上で探してくる。こっそり書いた雑文を学生が見つけてきたりする。紙媒体はいらなくなった。図書館まで足を運び、学会誌や論文集を見ることこそが勉強だ、などと老害丸出しの今日このごろである。

(はせがわ・しんや 大阪大学教授)

【追悼】

コントレラスさんをしのぶ

寺崎 英樹

長年、東京外国大学客員教授を務め、その後静岡の常葉学園大学（現常葉大学）教授を務められたエンリケ・コントレラス（Enrique Contreras López）さんが本年4月1日に逝去された。先生はスペインのアンダルシア出身、グラナダ近郊の村 Huétor Santillán で1937年3月12日に誕生された。御本人によると「貧しい村の貧しい家」で9人兄妹の長男だった。小学校の成績は優秀で、貧しい農村のこと、文盲の大人が多かったので、夜はそういう大人たちに読み書きを教えていたという。何しろ当時のスペインは児童の半数しか教育を受けていなかった。先生の幼少期はスペイン内戦時代と重なる。後にお聞きしたエピソードがある。内戦が始まると、村の青年たちは政治や思想についてはまったく無知のまま共和国軍に徴兵された。ところが、村がフランコ政権の支配下に入ると、青年たちは共和国軍に参加したというだけで銃殺されてしまったという。

先生は成績優秀だったことでイエズス会の目に留まり、進学の手が開けた。マラガの寄宿制学校を経て、1961年マドリード・コンプルテンセ大学を卒業、アメリカ滞在の後、来日し、上智大学に留学された。その後、イエズス会からは離れ、スペイン語教育の道に専念されることとなった。1968(昭和43)年に東京外国語大学スペイン語学科の外国人教師(後に客員教授)となり、1997(平成9)年、定年退職されるまで29年間勤務された。筆者は、先生が赴任される前の卒業生なので直接教えは受けていないが、1982年同大学に採用されたため15年間同僚として接することとなった。先生は温厚で明朗、教育熱心だったので、学生たちの評判はよく、「コントレさん」の愛称で親しまれた。90年代以降、文科省の方針が変わり、外国人教師は任期制となり、短期間で交代することになったため、先生のような名物教師が生まれる素地はなくなった。日本人と結婚され、晩年日本に帰化し、日本名は中村円と名乗られた。壮年時代は剣道もたしなまれ、三段の腕前であった。

先生の比較的初期の業績としては原誠他(編)『スペイン・ハンドブック』(三省堂、1982年)がある。先生は共著者の1人で、宗教、国民性、教育の計3章を執筆されている。これを読むと、先生の広い学識と偏りのない視点をうかがい知ることができる。残念ながら本書は絶版となっている。業績の中で特筆すべきものはスペイン語辞書の編纂である。先生は数多くの辞書の編纂に携わり、大きな貢献をされた。年代順に挙げると、次のとおりである。

- (1) 高橋正武、瓜谷良平、宮城昇、エンリケ・コントレラス(編)『スペイン基本語辞典』(白水社、1972年)
- (2) 宮城昇、エンリケ・コントレラス(編者代表)『和西辞典』(白水社、1979年)
- (3) 宮城昇、山田善郎(編者代表)『現代スペイン語辞典』(白水社、1990年)
- (4) 同上『現代スペイン語辞典(改訂版)』(白水社、1999年)
- (5) 有本紀明他(編)『和西辞典(改訂版)』(白水社、2000年)

(6) 原誠、Enrique Contreras 他 (編)『クラウン西和辞典』(三省堂、2005 年)

(7) 寺崎英樹、Enrique Contreras (編)『デイリーコンサイス西和・和西辞典』(三省堂、2010 年)

(8) 同上『クラウン西和辞典 (第 2 版)』(三省堂、2026 年)

このうち、(4) の西和と (5) の和西は複数の電子辞書に収録されたため、今日でもおそらく最も利用者の多いスペイン語辞典であろう。

筆者は (2) 以降の辞書すべての執筆に関わらせていただいたが、何と言っても思い出が深いのは最後の (8) である。増補改訂の作業は初め先生と筆者の 2 人だけでスタートし、後に 8 人の執筆者の方々が加わった。着手してから出版されるまでに 14 年を要した。先生は勤勉、緻密な仕事ぶりで、日本語も達意なので辞書編纂にはうってつけの人であった。晩年はこの仕事に献身されていたという印象である。昨年初めに原稿はほぼ完成したが、紙の辞書が売れない出版界の現状により刊行は未定となってしまった。

昨年大病を患い、リハビリ中であった先生は、いつ本が出版されるかずっと心配されていた。今春、ついに紙の辞典として刊行された時は非常に喜ばれた。3 月初めに筆者が受け取った最後のメールは “¡Albricias!” という表題で、冒頭には “Ayer recibí el diccionario y me llevé una enorme alegría.” と本を手にとった喜びが述べられ、後半では “El trabajo que precede y concluye el diccionario en sí, habrá conllevado un esfuerzo extraordinario. ご苦労様でした。” と日本語を交えてねぎらいの言葉が書かれ、末尾は “Ahora a descansar y gozar de la primavera que ya la tenemos a la vuelta de la esquina.” (さあ、休んで、すぐ近くまで来ている春を楽しもう) と締めくくられていた。しかし、残念なことに春を楽しむ時間はあまり残されていなかった。3 月半ばに 89 歳の誕生日を迎えられた後、まもなくして先生は急逝されたからである。まるで辞典の刊行を見届けて安心されたかのようにであった。あまりに突然の訃報で大変な衝撃だった。しかし、刊行がcaろうじて生前に間に合ったことは奇跡的と言うしかなく、仕事をともにした者にとってせめてもの慰めである。コントレラスさん、安らかにお休みください。

(てらさき・ひでき 東京外国語大学名誉教授)

El trabajo de Linguapax en América Latina

José Antonio Flores Farfán

Linguapax es una organización no gubernamental dedicada a la defensa de la diversidad lingüística, los derechos lingüísticos y la revitalización de las lenguas amenazadas. Constituye una de las entidades de la sociedad civil más destacadas internacionalmente a favor de la diversidad lingüística en un marco de fomento de la paz, entendiendo las lenguas como parte de una ecología social en la que se promueven valores positivos, como el respeto, la reciprocidad y la solidaridad. Semejantes valores han sido cultivados profusamente por la delegación de Linguapax en América Latina, activa desde hace más de dos décadas y una de las más antiguas de la ONG. Su base se encuentra en la Ciudad de México, en el Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología Social (CIESAS), desde donde proyecta su labor hacia el mayor número posible de comunidades originarias latinoamericanas, incluso entablando colaboraciones más allá de sus confines (p. ej. los EE. UU. o Rusia).

A través de un enfoque colaborativo, propicia el cooperativismo lingüístico y cultural con las comunidades desde lógicas ascendentes, logrando potenciar los magros recursos financieros, sumando esfuerzos y voluntades. Favorece el reconocimiento y acompaña la agencia misma de los hablantes de lenguas y culturas minorizadas, desarrollando *tequios*ⁱ lingüísticos (‘trabajo comunitario’), con participación directa de las comunidades originarias y organizaciones locales, como el **Plan de Revitalización del Náhuatl y del Totonaco** de la cooperativa *Tosepan Titataniske* (‘Unidos venceremos’, en Masewaltatol, ‘náhuatl’ de la Sierra Norte de Puebla, México). La revitalización lingüística es efectivamente una de sus líneas de acción más fuertes, acompañando a hablantes, docentes e investigadores en el desarrollo de metodologías de revitalización y el diseño de estrategias para fortalecer la transmisión intergeneracional de las lenguas minorizadas.

Junto a la organización de diplomados, talleres y cursos especializados, como el **primer Diplomado en Revitalización Lingüística en Perú** (2010), con participantes de diversos países latinoamericanos, desarrolla un modelo de **Formación en la práctica**, en el que los hablantes, desde la infancia, cultivan habilidades tanto orales como escritas vinculadas a la producción de **Materiales Educativos**, con metodologías lúdicas y en formatos multilingües y multimodales; entre otros, con animación, audio y realidad aumentada para lenguas con escasos recursos didácticos, promoviendo el uso de tecnologías digitales para la revitalización. En este contexto, fomenta la creación artística en lenguas originarias, propiciando la literatura, la música, los audiovisuales y otros medios

para la **Difusión Lingüística y Cultural** de alto impacto, llegando a amplias audiencias de la sociedad mayor hispanohablante, con desarrollos como los de *Las machincuepas o Los sueños del tlacuache*ⁱⁱ.

La investigación de los procesos de desplazamiento, mantenimiento y resistencia de las lenguas se vincula al **desarrollo** de propuestas para fortalecer las comunidades lingüísticas y establecer buenas prácticas de micro y macro **Políticas Lingüísticas**, ámbitos en los que asesora y promueve políticas públicas favorables a las lenguas originarias, como el proyecto **Grupo de Acompañamiento a Lenguas Amenazadas**, que ha generado diagnósticos participativos para fortalecer tanto a las instituciones de políticas lingüísticas como a las propias comunidades.

En conjunto, Linguapax América Latina no se limita a documentar lenguas pasivamente, sino que trabaja un enfoque de activismo documental para que **las lenguas originarias continúen siendo habladas, enseñadas, utilizadas en la vida cotidiana y fortalecidas mediante la educación, la tecnología, las políticas públicas y el trabajo comunitario**, siempre desde la afirmación de los derechos lingüísticos y la colaboración con los propios pueblos.

Para leer y conocer más recursos específicos, visítense:

<https://tlacuatzin.org>

<https://ciesasdocencia.academia.edu/JoséAntonioFloresFarfán>

<https://linguapax.org/estructura-linguapax/#delegacions-antenes>

ⁱ *Tequio* proviene de la palabra *tekitl*, ‘trabajo’ en náhuatl, incorporada al repertorio léxico y sociocognitivo del español mexicano. Implica un trabajo solidario de y para las comunidades, algo semejante a la “mano devuelta” entre familias, (‘te apoyo, me apoyas, nos apoyamos’), práctica muy común, sobre todo en los pueblos con arraigo originario.

ⁱⁱ Estos materiales audiovisuales lúdicos recuperan la variedad del español mexicano y sus epistemologías como un recurso educativo que permite desde el propio español acercar a las audiencias la lengua náhuatl, vinculada a la historia y cultura mexicanas más profundas, véase:

<https://www.youtube.com/watch?v=Drzu0eT8wUk>

https://www.youtube.com/watch?v=FMSTOV1uu_s

(ホセ・アントニオ・フローレス・ファルファン リングアパックスラテンアメリカ代表)

【エッセイ 2】

Lo que las lenguas indígenas nos enseñan sobre el español

Ana Isabel García Tesoro

Si un visitante llega a Guatemala, quizá le sorprenda escuchar expresiones como «un mi tío», «si yo voy en la escuela» o «los indígena acostumbran...». Es fácil juzgarlas desde la norma escrita y considerarlas errores. Sin embargo, cuando se escucha con atención a quienes las emplean y se conoce la historia lingüística de sus comunidades, surge otra pregunta: ¿qué pueden enseñarnos estas formas de hablar sobre el español?

Durante años he estudiado variedades surgidas del contacto prolongado entre el español y lenguas indígenas de Guatemala, Perú y Colombia. Aunque se trata de contextos muy diferentes, todos muestran algo fundamental: las lenguas no son sistemas inmóviles y aislados. Cambian porque sus hablantes las utilizan para vivir en sociedades plurilingües y porque quienes hablan dos lenguas ponen en juego todos los recursos de su repertorio para comunicarse.

En las comunidades mayas de Guatemala, por ejemplo, el español ha convivido durante siglos con lenguas como el tz'utujil, el k'iche', el q'eqchi' o el kaqchikel. De esa convivencia han surgido formas particulares de organizar la concordancia, emplear los pronombres o seleccionar las preposiciones. Construcciones como «los indígena» no carecen necesariamente de plural: este puede aparecer una sola vez, en el determinante, en lugar de repetirse en todos los elementos del grupo nominal. No estamos ante una ausencia caótica, sino ante una manera diferente y sistemática de distribuir la información gramatical.

En el español andino de Cuzco, en contacto con el quechua, los hablantes crean también estrategias expresivas propias. Dicen, por ejemplo, «hago hervir el agua» o emplean «ya también» para destacar una información nueva y contrastarla con una situación anterior. No se limitan a copiar estructuras del quechua, sino que aprovechan posibilidades que ya existen en español, les atribuyen nuevos valores y producen soluciones adaptadas a sus necesidades comunicativas. El contacto, por tanto, no empobrece la lengua: activa su capacidad creadora.

Algo semejante ocurre en la Sierra Nevada de Santa Marta, en Colombia, donde el español convive con el ikun, lengua del pueblo arhuaco. En el español de algunos bilingües, la forma «lo» puede funcionar como marcador de objeto sin distinguir género, y en ciertos contextos el pronombre puede omitirse. Estos usos responden a regularidades relacionadas con la animacidad del referente y con las trayectorias bilingües de los hablantes. Lo que desde fuera parece una desviación revela, al analizarlo, la emergencia de una gramática coherente.

Pero las formas lingüísticas nunca se valoran al margen de las personas que las usan. En la Sierra Nevada de Santa Marta, una joven arhuaca narró que, cuando alguien no habla el español considerado correcto, «te aferras a no hablar, a callarte y [...] [te] empieza a ganar el miedo». Sus

palabras recuerdan que calificar una variedad como deficiente puede convertirse en una forma de descalificar a sus hablantes. Con frecuencia, bajo la corrección lingüística se esconden jerarquías históricas entre lenguas, culturas y comunidades.

Las variedades de contacto nos invitan, así, a estudiar el español con otra mirada. Nos enseñan que su historia no pertenece únicamente a academias, libros o grandes centros urbanos, sino también a millones de hablantes indígenas que lo han incorporado a sus repertorios en México, Guatemala, Colombia, Ecuador, Perú, Bolivia, Paraguay y otros países, sin abandonar por ello otras maneras de nombrar y comprender el mundo. Escucharlos permite descubrir un español más amplio, dinámico y plural. Tal vez la principal lección sea esta: comprender una lengua no consiste solo en saber qué formas admite su norma, sino también en reconocer las vidas, los saberes y las historias que hablan a través de ella.

(アナ・イサベル・ガルシア・テソロ アンティオキア大学教授)

【エッセイ 3】

メキシコにおける「先住民」および「民族」意識の動態

禪野 美帆

筆者はメキシコにおける先住民について、文化人類学的視点から、都市化や都市部との関わりにおいて 1989 年から研究している。

一般的に、「先住民」や「民族」というと、その文化、すなわち、言語、儀礼、衣服、食事などの固有性が強調されることが多い。しかし、「純粋」を求めることはできない。なぜなら、ラテンアメリカの先住民は 500 年以上にわたって征服、植民地化、近代化、グローバル化といった大きな変化の過程を経ているからである。こうした状況は、世界のあらゆる人々に関していえることである。

それは「日本人」を考えればすぐにわかる。日本人は、家では靴を脱ぎ、よくお辞儀をして、箸を使い、時には正座もする。しかし、食卓には米や焼き魚だけでなく、ハンバーグやパスタも一緒に並ぶ。衣服も和装で日常を過ごす人はほとんどいない。こうした状態自体が日本の文化であり、その内容は日々変わっている。

そもそも、メキシコでは「先住民」や「〇〇人」と呼ばれる人々は、自らをそうだと思っているのか。筆者が 1989 年から 2001 年まで調査したオアハカ州のミシュテカ高地の村落では、当時はそうではなかった。彼らは、行政区の最小単位であるムニシピオ (municipio) をプエブロ (pueblo) と呼び、そのプエブロの者としてのアイデンティティを強く示していた。自分たちのことを「ミシュテカ人」ということも、ましてや「先住民」ということもなかつ

た。それどころか、隣村に一種の敵対心を持っていた。つまり、隣はもう「仲間」や「我々」ではないのである。

しかし、アメリカ合衆国の人類学者ナゲングストとカーニー (Nagengast and Kearney) は、1990 年の論文で、「アメリカ合衆国においてミシュテカのエスニシティが生成された」と述べている。これは、メキシコにおける主に使用言語を指標にした民族の区分の中では存在する「ミシュテカ人」が、当事者のアイデンティティとしては表出されないが、移住先のアメリカ合衆国ではその民族名を冠した組織が創設されたことを指している。移住先での相互扶助の必要性や、アメリカ人に「わかりやすくする」ために、メキシコではほとんど使われない民族名が組織名になったと考えられる。つまり、「アイデンティティ」や「名乗り」は状況次第であることを示している。しかし、その組織の成員は、少なくとも創設者は、いくつかのプエブロ出身者に限られていただろう。上述したように、出身地では、「隣村の人はもう仲間ではない」状態であり、それは移住先でもすぐには変わらないはずである。

一方で、近年、「先住民」や「民族」を尊重する動きは、メキシコでも加速している。1994 年のサパティスタ民族解放軍 (EZLN: Ejército Zapatista de Liberación Nacional) による、先住民の権利を求める武装蜂起、国際的には 1989 年の ILO による「独立国における原住民及び種族民に関する条約」の採択、そうした国内外の動きを経て、2001 年にはメキシコ合衆国政治憲法第 2 条が改正され、国家における先住民の権利が規定された。特に 2014 年に創設された政党、国民再生運動 (MORENA: Movimiento Regeneración Nacional) が 2018 年に政権の座についてからは、「先住民」や「女性」の尊重が政策のスローガンとして強調されている。2024 年のシェインバウム大統領の就任式でも「先住民」の衣装を着た「女性」が「儀礼」を行なった。このような状況が続けば、「先住民」や「〇〇人」であるというアイデンティティは強化されるだろう。実際にそのような「名乗り」の機会も増えている。

しかし、プエブロ自体、統治や布教のために、スペイン人によって植民地時代に作られたものであり、先スペイン期の集落そのものではない。人々のプエブロを中心とした生活空間や意識自体、統治者側との関係で作られてきたのである。

すなわち、これからも、外部との状況次第で、「先住民」や「民族」の有り様も、当事者の行動や意識も変化し続けていく。実際に筆者が 2002 年以降調査しているメキシコ市内の旧先住民村落の居住者は、その土地や自然資源を守る権利を求める過程で、オリヒナリオ (originario) という新たな呼称を 2007 年頃から使うようになった。「先住民」も「民族」は、その意識や自称も含めて、常に変化の渦中にある。

引用文献

Nagengast, Carole, and Michael Kearney. "Mixtec ethnicity: Social identity, political consciousness, and political activism." *Latin American research review* 25.2 (1990): 61-91.

(ぜんの・みほ 関西学院大学教授)

【エッセイ 4】

声のなかの歴史、文字のなかの音 —La Fátima から植民地期マヤ語文書へ—

大越 翼

-Sí, allí vive mi plimo Felipe.

-¿Y cómo se apellida él?

-Chan, Felipe Chan, se llama. Ahola tiene dos hijos, está feliz.

何気ない会話の中で、ふと私は違和感を感じた。言っていることはわかるのだが、発音がおかしい。私が居たのはメキシコ、カンペチェ州にある7家族からなる小さな集落ラ・ファティマ（La Fátima）で、そこに住む50代後半の男性と話をしていた時のことだった。彼はユカタン・マヤ語を日常語とし、スペイン語はたどたどしい。何が「違う」のだろう。話の内容はボイスレコーダーに任せて、彼の発音に注意を向けた。違和感の理由に気づいたとき、私は鳥肌が立つ思いをした。植民地時代のマヤ文書に出てくるスペイン名表記の特徴そのものではないか、と。

アパートに戻り、早速会話を文字起こしした。ところがAIを用いた機器は、発話を忠実に文字化してくれるが、綴りは「正確できちんとした」スペイン語の正書法に従ってしまう。いやいや違うぞ、こうじゃなかった。録音を聞き直し、正書法によって見えなくなっていた発音の特徴を、耳にした通りに書き直してみた。その一部が冒頭の会話である。質問者は私だ。

そこで初めて、違和感の正体がはっきりした。話者はFelipeをPelope、felizをpelizと発音していた。スペイン語のfがpになっている。それだけではない。primoはplimo、ahoraはaholaと聞こえた。今度はrがlになっていたのである。ユカタン・マヤ語固有の音体系には、スペイン語のfやrに相当する音がないため、それぞれpとlに置き換えられることがある。ラ・ファティマでは日常生活のほとんどがマヤ語で営まれ、スペイン語を話すのは外部の人間が訪れた時くらいである。そうした環境も、この発音と無関係ではないのかもしれない。

私は、半世紀近く歴史人類学的研究の一環としてマヤ村落で野外調査を続け、これに並行してアルファベット表記のマヤ語で書かれた文書の分析、解釈を行なってきた。fがpに、rがlに置き換えられた綴りには、文書の中で幾度も出会っている。だが、それを現在の人びとの声として意識したのは初めてだった。その驚きから、私はあらためて、マヤ語がアルファベットで書かれるようになった16世紀のことを思った。

マヤ人はスペイン人の到来以前から独自の文字体系を持っていたが、植民地支配の開始後は、自らの言葉をアルファベットで書くようになった。これには次のような歴史的背景がある。当初、スペイン王室は、新大陸に修道士を派遣して先住民にスペイン語を教えさせ、その上でキリスト教を布教しようと考えていた。しかし、現地に赴いた修道士たちは、それでは先住民がスペイン語を習得するまで布教を待たなければならず、あまりに迂遠で

現実的ではないことに気づいた。そこで、まず修道士自身が先住民語を学び、「彼らの言葉」で布教する方がはるかに早く効果的だと提案したのである。王室もこれを認め、宣教師が先住民語を学ぶ制度を整えていった。こうして、ユカタン地方では、フランシスコ会修道士がマヤ人協力者の助けを得ながらマヤ語の音をアルファベットで表し、これを使って文法書 (arte) や語彙集 (vocabulario) を作成した。

彼らの知的な足掛かりとなったのは、ネブリハ以来の文法学と、メシーカ (アステカ) 王国の事実上の公用語であったナワトル語を記述した先行文法書編纂の経験である。言語系統も構造も異なるマヤ語を、名詞、代名詞、動詞といった品詞や、活用、時制といった既知の文法範疇によって捉えようとしたため、マヤ語固有の仕組みを十分に説明できず、誤った分類も生じた。それでもなお、修道士たちは布教と教授に用いるため、マヤ語の文法を簡潔な規則にまとめ上げ、キリスト教を語る道具として整備していった。

このアルファベット表記のマヤ語を用いたのは、宣教師だけではなく、修道院付属学院で読み書きを学んだマヤ人貴族の子弟は、卒業後、一方で教会の聖歌指導者 (maestros cantores) となり、教会での仕事のほかに、密かに祖先の歴史、暦、祭礼、予言、治療の知識などを記録した。また、村参事会の書記となった者たちは、行政文書、土地文書、遺言書などの公的書類を作成した。布教のために整えられた文字は、マヤ人自身が権利を守り、過去と世界を語り、記憶を未来へ伝えるための道具になったのである。

もっとも、こうした書き言葉を自在に扱ったのは、村の書記や教会関係者など一部の人々だった。大多数のマヤ人にとって、マヤ語は何よりも日々の話し言葉であり続けた。植民地時代の文書に見られる f と p、r と l の交替も、単なる綴りの間違いではなく、書記がスペイン語の単語をどのように聞き、発音していたのかをうかがわせるのだ。

La Fátima で耳にした「Pelipe」は、古文書の上で何度も目にしてきた綴りが、単なる文字ではなく、人びとの耳と口を通った音の痕跡でもあったことを、私に実感させた。あの日、現在を生きる人の声を通して、彼方にあると思っていた植民地時代の文書世界と目の前の生活世界とが、私の頭の中で突然つながったのだ。

参考文献

Barrera Vásquez, A. (Dir.). (1980). *Diccionario maya Cordemex: maya-español, español-maya*. Mérida, Yucatán: Ediciones Cordemex.

Hanks, W. F. (2010). *Converting Words: Maya in the Age of the Cross*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

(おおこし つばさ・京都外国語大学教授)

【エッセイ 5】

パラグアイにおけるグアラニー語について

青砥 清一

グアラニー語はトゥピ・グアラニー語族に属し、主にパラグアイならびにアルゼンチン、ブラジルおよびボリビアの周辺地域で話されている。話者人口は 600 ～ 700 万人程度と推定される。パラグアイ政府統計局 (INE, 2024) によると、同国の 5 歳以上の人口の 38.7% (約 210 万人) が家庭内でグアラニー語とスペイン語の双方を使用し、30% (約 164 万人) が主にグアラニー語でコミュニケーションをとっている。家庭内で主にグアラニー語を使用する割合には地域差があり、地方では 53.1% で半数を超える一方、都市部では 16.3% に下がる。

歴史的にグアラニー語は、イエズス会士により文法と語彙が記述され、伝道所 (reducciones jesuíticas) などでの布教活動に用いられた。パラグアイ独立 (1811 年) 後、グアラニー語は国家団結・愛国心の象徴として扱われる一方で、西洋化・近代化のため行政や教育から排除されるという二面的な位置づけとなった。ストロエスネル独裁政権下 (1954 ～ 1989 年) においてもグアラニー語は反共ナショナリズムに利用され、1967 年憲法第 5 条で「国家語 (idioma nacional)」に指定された (ただし公用語 [idioma oficial] はスペイン語のみ) が、同時に同化政策に基づくスペイン語化が図られ、学校教育での使用が制限された。民主化後は、現行 1992 年憲法の第 140 条によりスペイン語とともに公用語に定められている。国際的には 2006 年からスペイン語・ポルトガル語に加えて南米南部共同市場 MERCOSUR の公用語に指定されている。パラグアイ人がグアラニー語に対して抱く感情は、かつては尊重と軽蔑の間で揺れ動いていたが、グアラニー語の法的・社会的地位が向上し、現在では国民的アイデンティティの象徴としておおむね肯定的に受け止められている。

1994 年の教育改革によりスペイン語とグアラニー語のバイリンガル教育が制度化され、初等教育 (9 年間) と中等教育 (3 年間) において両言語が指導用言語として指定されている。しかし実際は、グアラニー語による教材や指導法の不備などにより、学年が上がるにつれてスペイン語が優勢になる。地方ではグアラニー語を第一言語として話す子どもが多い中、このようなバイリンガル教育の運用上の課題は貧困問題とともに初等教育修了率を 89% (世界銀行、2024 年) に留めている要因の一つに挙げられている。

グアラニー語は長年にわたり正書法と文法が統一されていなかった。そのため公文書は主にスペイン語で記されてきたが、2010 年の言語法の制定を経て、2018 年にグアラニー語アカデミーから『Gramática Oficial de la Lengua Guaraní』が刊行され、公的機関で用いる標準文法が整備された。言語政策局が国内外の行政機関と協力してグアラニー語の正常化を推進している。同局のウェブサイトにはグアラニー語政策などに関する情報のほか、グアラニー語辞典などが掲載されている (<https://spl.gov.py/es/> [2026.7.30 閲覧])。

スペイン語とグアラニー語の混交した話し方をパラグアイで『ジョパラ』(jopará) という。大衆の間では、学校で習う規範的なグアラニー語よりも、柔軟に変化するジョパラのほう

が好まれ、日常会話で広く用いられている。いくつか例を挙げると、グアラニー語 *che*「私の」とスペイン語 *amigo* の合成した *chamigo* は、口語で *mi amigo* の代わりに親しみを込めて用いられる。*sus cuates kuéra*「彼の仲間たち」は、スペイン語地域変種 *cuate* の複数形にグアラニー語の複数標識辞 *kuéra* が組み合わされている。*La querencia tira, ¿ayépa?*「故郷が恋しいですよ?」は、グアラニー語の間投詞 *ayépa* による付加疑問文である。*La carne semi cocinada es revenenosa ra'e*。「生焼けの肉はとても体に悪かったのだな」という文では、グアラニー語で感嘆過去 (*pasado admirativo*) を示す *ra'e* が文末に生起している。

スペイン語との言語接触については(研究者によって見解が分かれるが)、パラグアイの地域変種(主に口語)においてグアラニー語の影響がみられる。まず音声面では、声門閉鎖音 [ʔ] の挿入、スペイン語には存在しない中舌高母音 [ɨ] の使用、語頭の破裂音の鼻音化(例: *beso* [mbéso]) などが観察される。形態統語面については、定冠詞の代わりに指示形容詞を用いて総称性を表す用法があり(例: *Esas naranjas paraguayas son siempre muy dulces*。「パラグアイのオレンジはいつもとても甘い」)、グアラニー語に定冠詞がないことが影響しているとの説がある。スペイン語前置詞 *en* や *por* が移動動詞や心理動詞などと共起するという現象などもみられる(例: *Voy en casa del médico*。「私は診療所に行く」; *Necesito por vos*。「私は君が必要だ」)。これらもグアラニー語の後置詞 *pe* や *rehe* の影響によるとの見解がある。

とりわけグアラニー語の影響を受けているのは語彙面である。動植物、食べ物、民芸品、地名など多くの意味分野においてグアラニー語系の語彙がみられる。例えば、*jagua*「犬」、*takuara*「竹」、*chipa*「チパ」(トウモロコシのパン)、*manduví*「ピーナッツ」、*ñanduti*「ニヤンドゥティ」(伝統的なレース刺繍で「クモの巣」の意)、*Ypacaraí*「イパカライ湖」(「神聖な湖」ほか語源諸説あり) などである。グアラニー語の擬音語に由来するものとして、*pororó*「ポップコーン」や *tereré*「テレレ」(冷やしマテ茶) などがある。

グアラニー語は文学においても重要な役割を果たしている。1989年にセルバンテス賞を受賞したパラグアイの作家 Augusto Roa Bastos は、グアラニー語の統語構造・語彙・リズムをスペイン語に融合させた「グアラニー語化されたスペイン語 (*el español guaranizado*)」によって祖国の二重言語性と文化的アイデンティティを表現した。

(あおと・せいいち 神田外語大学教授)

【エッセイ 6】

グアラニ

—その社会組織と文字文化—

武田 和久

グアラニは、現在のラプラタ地域（パラグアイ南東部、アルゼンチン北東部、ブラジル南部）およびボリビア東部で広く分散して暮らす、グアラニ語を話す人々の集団である。比較言語学の観点に立てば、グアラニ語はトゥピ・グアラニ語族の一つを形成し、さらに同語族はトゥピ語族の一つを形成する。元々アマゾン川流域で暮らしていたグアラニは、自然環境の変化や人口増加などの要因に伴い、紀元前 2000 年頃から南部への移住を開始したと考えられている。そして西暦 500 年頃にはラプラタ地域一帯に定着した。キャッサバ、サツマイモ、トウモロコシなどを主食とし、焼き畑農業を行う必要上、肥沃な土地を求めて数年おきに移動を繰り返す半定住生活を送っていた。このような移動は単なる経済的必要性によるものではなく、宗教的・宇宙論的な世界観とも深く結びついていた。

グアラニの在来の社会組織は拡大家族を基本とする父系社会であり、テイイル (te'yi ru) と呼ばれる男性家長が一つの家屋、すなわち部族、一族、家系を同じくする人々の集合体を率いることで成立していた。この集合体の規模は家長の権威によって様々であり、家長は政治や宗教に関わる諸事を司った。家長は宗教儀礼を通じて同じ部族や一族を次の移住先へと導く大役を担っていた。こうして信頼を得た有能な家長が複数の部族集合体（テコハ tekoha）(teko = 「ある集団の伝統的な生き方、暮らし方、習俗、存在様式」と ha = 「場所」の合成語) を同じ移住先に先導することもあり、この過程で家長 (te'yi ru) はより上位の首長（トゥビシャ tuvicha）と見なされた。なお今日、グアラニ先住民運動において、tekoha は文化的権利や土地権を主張する際の重要な概念となっている。

ヨーロッパからやって来た征服者や宣教師たちがラプラタ地域に進出し始めた 16 世紀前半のグアラニ社会は以上の様態だったが、エンコミエンダや集住政策 (reducción) が現在のパラグアイの首都アスンシオンとその周辺地域に導入されると、グアラニの従来の生活形態に大きな変化が生じた。エンコミエンダとは先住民労働力の利用を認める植民地制度であり、reducción は先住民を特定の集落へ集住させる政策であった。二つの制度ともグアラニに定住を強いるものであり、数年おきに移動を繰り返す生活は放棄せざるを得なくなった。そしてこれに伴い、家長 (te'yi ru) ないし首長 (tuvicha) の役割にも一定の変化が生じた。

すなわち二つの制度において、te'yi ru や tuvicha は植民地体制下における首長 (cacique) と同定され、ヨーロッパ人に仕える「良き者」として振る舞い、新世界においてキリスト教社会を築く礎となることが期待されたのである。他方、彼らが率いる集団にとっては、鉄製農具をはじめとするヨーロッパ由来の物資は大きな魅力であり、現実的な利益を考慮して新制度を受け入れる者も少なくなかった。だがヨーロッパ人の存在が自身の権威の失墜につながると悟った者の一部は武力抵抗を選択した。歴史上最も有名なのはウルグアイ川東岸一帯に勢力を誇ったニェス (Ñezú) である。17 世紀前半、彼は自身の臣従者に命じ

て Roque González de Santa Cruz をはじめ三名のイエズス会士を殺害した。ちなみに彼らは 1988 年に列聖されている。

もつとも、ニェスは例外的な存在であり、大半のグアラニはイエズス会士たちが設けた布教区 (reducción) への参加を選択した。エンコミエンダのもとで隷属化が進む一方、イエズス会布教区では入植者の立ち入りが原則として制限されていたため、多くのグアラニにとって布教区は比較的安全な生活空間として映ったのである。そこではキリスト教教育とともに農業、手工業、音楽教育なども行われ、独特の共同体社会が形成された。

1609 年に最初の布教区が設立されると、その数は急速に増加し、現在のブラジル南部にも広がった。しかし同時期、ブラジル方面からの先住民奴隷狩り部隊 (バンデイランテ bandeirante) の襲撃により多くの布教区が壊滅した。こうした危機の中で、大首長ニコラス・ニェエンギル (Nicolás Ñeenguirú) の活躍もあり、1641 年のムボロレの戦いでイエズス会とグアラニ連合軍は勝利を収めた。この勝利は布教区の存続を決定づける重要な転換点となった。

その後、マテ茶を中心とする商品作物の生産や農牧場の運営も軌道に乗り、布教区は経済的繁栄を迎えた。18 世紀前半には総数 30、総人口 14 万人を超えるまでに成長し、南米植民地社会の中でも特異な共同体として知られるようになった。

こうした繁栄の最中、布教区ではグアラニ語を用いた書物文化が花開いた。有名な知識人ニコラス・ジャプグアイ (Nicolás Yapuguay) は、1724 年に出版されたグアラニ語教理問答書 (Catecismo) の改訂作業に従事し、1727 年には説教集 (Sermones y ejemplos) を出版した。これらは布教区内の印刷機で作成されたものであり、先住民言語による出版文化として極めて重要な意味を持つ。また、イエズス会士の著作 (Antonio Ruiz de Montoya の *Conquista espiritual*, 1639 や、Nicolás del Techo の *Historia provinciae Paraquariae Societatis Iesu*, 1673) がグアラニ語に翻訳され、手稿として流通したことも注目される。こうした活動は、グアラニが単なる布教対象ではなく、知的活動の主体としても機能していたことを示している。

しかし、1767～68 年のスペイン領全域からのイエズス会追放とその後の布教区の衰退も重なり、グアラニ語を用いた作品が生み出される機会はめっきり減ってしまった。さらに 19 世紀の独立戦争や人口移動、混血化によって、グアラニそのものの身体的痕跡もほぼ消滅した。現在のグアラニ系先住民の多くは、植民地期布教区の直接的な子孫というよりも、布教区への編入を拒み続けた集団が「グアラニ化」した末裔と考えられている。

それでもなお、今日ではグアラニ系先住民と認知されている知識人や文筆家が活発な活動を展開している。Almires Martins Machado はグアラニ独自の法体系を主張し、Olívio Jekupé はグアラニ自身の語りによる文学作品を発表している。また Eliel Benites は、グアラニ思想の根幹をなす teko の概念を哲学的に論じている。彼らの活動は、植民地期に形成された文字文化や知的伝統が完全に断絶したのではなく、現代において新たな形で再生されつつあることを示しているのである。

(たけだ・かずひさ 明治大学准教授)

【エッセイ 7】

言語の消滅の危機からの民族アイデンティティの復興 —国勢調査から考えるナワトーピピルの人々の場合—

敦賀 公子

中米地峡の国々には、おもにグアテマラに居住するいくつかのマヤ系の言語は別として、今まさに消滅の危機にある言語が少なくないが、その状況下でありながら、民族アイデンティティが復興しつつある事例も見られる。本稿では、その一例であるエルサルバドルのナワトーピピル（náhuat-pipil, 以下ピピルと記す）の人々のケースについて、近年の国勢調査結果を中心に概観したい。

1. ピピル語の消滅の危機への要因

ピピル語は言語類型学上、メキシコ中央高原のナワトル語などと同じユト・ナワ / アステカ語族に分類される。“ピピル”は16世紀の史料に、現在のサンサルバドル近郊に存在した王国の民族名として記され、“pilli”(貴族)に由来するとされる。ナワ系言語は、先スペイン期の広域通商語で、植民地時代にはスペイン人と多様な先住民間の媒介言語でもあった。グアテマラやニカラグアにも同系言語が存在していたが、20世紀初頭には消滅した。

先住民語の話者数減少は、その言語が国家語へ移行する現象でもある。暴力、搾取、混血、強制移住、同化主義教育、経済的状况などが主な要因であるが、ピピルの場合、特に1932年の政府軍による西部のコーヒー農園の先住民労働者への弾圧に因るところが大きい。世界恐慌によるコーヒー価格大暴落が発端で起こった、共産党書記長率いる反政府勢力と農民らによる蜂起を政府軍が武力鎮圧した惨事である。その犠牲者は3万人とも5万人とも言われるが、多くがピピルの人々であった。言語や民族服などが標的とされたため、ピピルもその他の先住民の多くが自ら文化表象を隠し、その後の軍政時代と内戦時代を生きる道を選択せざるをえなかった。

2. 国勢調査から民族アイデンティティの復興を考える

1992年内戦が終結し、先住民の権利を見直す国連宣言なども加味された民主化政策が推進されることとなった。終戦後初めて実施された2007年の国勢調査もその一例である。以前は調査票の「民族」関連の問には「先住民」、「メスティソ」、「白人」、「外国人」という選択肢が挙げられ、個別の民族名はなかった。しかし、2007年調査では史上初めて民族名を列記し、帰属民族を問う質問が加えられ、その回答は言語運用能力不問かつ回答者各自の自己決定が尊重された。その後、第2回目は2024年に実施された。帰属民族に関する質問は、前回の民族名に加え近隣諸国からの移民を考慮し、マヤ・ Choltei、マヤ・ポコマン、シンカ、マンゲ、ミヘ、アルグイラクが加えられたが、表1では紙幅の都合で「その他」に含めている。また、本稿では取り上げないが、アフリカ系の人々に向けた質問が別途設けられた。

これら2回の調査結果をまとめたのが表1である。帰属民族を先住民と自己決定した人

口は、2024 年には前回の約 5 倍の増加を示し、中でも、ピピルは 8 倍を超えている。それでも、20 世紀前半の先住民人口は、総人口比約 20 パーセントと推計する人類学や人口史の研究²を考えると、弾圧による傷跡は大きいと言わざるをえない。

表 1 内戦終結後の国勢調査の帰属民族別人口（単位：人）

	2007 年	2024 年
総人口	5,774,113	6,029,976
先住民人口（総人口比）	13,310 (0.2%)	68,148 (1.2%)
ナワトーピピル	3,539	29,445
レンカ	2,012	13,888
カカウィラ	4,165	6,256
その他の民族	3,594	18,559

* 2024 年国勢調査（エルサルバドル中央銀行 <https://geoportal.bcr.gob.sv/>：閲覧日：2026 年 8 月）および最終報告書（2025 年発刊）¹をもとに筆者作成。2007 年調査は経済省国勢調査局が所管した。

なお、調査票の言語運用能力に関する質問は、2007 年には、総じてスペイン語を話すとの前提のためか、第一言語を問う質問はなく「スペイン語以外に話す言語」（第二言語）を問う質問があった。2024 年は、第一言語を尋ね、次に具体的な第二言語が問われたが、2025 年発刊の最終報告書には第一言語に関する言及はない。また、両調査とも「第二言語」として 9 割以上が英語と答えた中、ピピル語と答えた回答者は、2007 年で 0.1 パーセント、2024 年では 0.2 パーセントを示した。

おわりに

西部のソンソナテ県山間部にはピピルの集落が点在し、圧政時代も家庭内などの限られた空間でピピル語を密かに継続使用し、内戦終決後、独自に継承活動に取り組んだ話者も存在した。現地のドン・ボスコ大学言語学者、レムス博士は話者数について、2004 年時点で約 200 名の高齢話者を確認し³、最近の SNS の談話では、現在わずか 50 名ほどだと述べている。しかし、その 50 名の内、80 才以上の数名の母語話者以外は、次世代の話者だという。つまり厳しい時代を生き抜いた母語話者らによる継承活動が新話者を育成したのである。そして、その新話者らは、2010 年に始まったドン・ボスコ大学監修の復興プロジェクト Cuna Náhuat の先生たちでもある。これは、2 才から 5 才の幼児を対象にピピル語を教える幼稚園のような塾のような学び舎で、同ホームページによると現在まで 600 名を超える子供たちが学び、小・中学生になっても自文化の重要性を認識し、第二言語としてピピル語を継承する卒業生も紹介されている。

教育省の助成や UNESCO など海外からの支援も受け、昨年、3 校目が開校された。中米

各地の関連団体も同プロジェクトに注目している。国勢調査結果にも、このようなピピルの人々の復興・継承活動の成果も垣間見えるのではないだろうか。

¹2024 年国勢調査最終報告書は次のとおり。VII Censo de Población y VI de Vivienda El Salvador 2024 Informe de Resultados, Banco Central de Reserva, 31 de Marzo de 2025.

²Adams, Richard N. (1993)“Etnia y Sociedades(1930-1979)”, pp.172-177.,*Historia General de Centroamérica V*, ed. Héctor Pérez Brignoli, Sociedad Estatal Quinto Centenario y FLACSO, Madrid, pp.165-243. Barón Castro, Rodolfo (2002) *La Población de El Salvador*, CONCULTURA, San Salvador, p.406.

³ Lemus, Jorge E.(2004) “El pueblo pipil y su lengua”,p.17, *Científica* 5, pp.8-29, Universidad Don Bosco, San Salvador.

(つるが・きみこ 明治大学兼任講師)

【エッセイ 8】

山田善郎先生の百歳のご長寿をことほぐ

福嶋 教隆

日本イスパニヤ学会元会長 山田善郎（やまだ よしろう）先生は、2026 年 10 月 14 日に満百歳のご長寿をお迎えになる。

山田先生は 1926 年 10 月 14 日に大阪府堺市にお生まれになり、1948 年、大阪外事専門学校西班牙語部を卒業された。なお、当時は、東京外事専門学校、天理語学専門学校と合わせて、日本には 3 校しかスペイン語を学べる高等教育機関がなかった。その翌年、学制改革により、先生の母校は大阪外国語大学へと改組された。1951 年、先生は同大学外国語学部イスパニア語学科の助手として、大学研究者の道を踏み出された。

戦後まだ日が浅く、必要な洋書や海外の情報の入手にも事欠く中で、若き日の先生は研究教育に専心された。スペインへの在外研究（サラマンカ大学、1956）やメキシコへの学術出張（1963）といった、ようやく得た機会での知見を活かして、動詞の法・時制およびイスパノアメリカのスペイン語など、スペイン語学に関する論考を発表された。大学書林が刊行していた『月刊スペイン語』にも多くの記事を寄稿された。

1970 年の大阪万博を前にして、NHK はテレビスペイン語講座を大阪局で制作することにした。山田先生は初代の講師として、1967 ～ 1971 年の間、講座を担当され、全国に多くの hispanófilos を育まれた。私事にわたるが、この小文の筆者もその一人である。

1971 年に教授に昇任されてからは、さまざまな大学運営の要職を兼務され、ご多忙を極められたが、その中で育成された研究者たちとともに、多くの編著を世に出された。その活発な研究教育活動は、大阪外国語大学第 7 代学長となられた 1987 年以降も、また退官され、

名誉教授となられた 1993 年以降も続いた。

1994 年には関西外国語大学外国語学部スペイン語学科に教授として着任され、2008 年 3 月まで教壇に立たれた。また同大学顧問（1996 ～ 2007 年）、理事（2009 ～ 2013 年）として運営にも貢献された。

山田先生は、1955 年の創立時以来の本学会会員であり、1996 ～ 1998 年には会長を務められるなど、中心的な役割を果たしてこられた。現在も名誉会員としてご参加いただいている。

先生のご著書、ご編著の中で特筆すべきは、辞書類の数々である。『和西商品名辞典』（1961、大阪商工会議所・編、山田善郎他・執筆、白水社）を皮切りに、『和西辞典』（1979、宮城昇；Contreras, Enrique・監修、山田善郎他・執筆、白水社）、『現代スペイン語辞典』（1990、宮城昇；山田善郎・監修、白水社）、『スペイン語大辞典』（2015、山田善郎他・監修、白水社）のような重要な辞書の編纂に関わられた。

また、語学に関する著作では、『インデックス式スペイン文法表』（1967、白水社）、『シート版スペイン語第一歩』（1969、白水社）、『NHK スペイン語入門』（1969、日本放送出版協会）、『スペイン語の決まり文句 ― はじめて勉強する人のために ―』（1971、実業之日本社）、『スペイン・ジョーク集』（1980、実業之日本社）といった入門書、一般向けの書籍を著される一方で、『ラテンアメリカ世界 ― その歴史と文化 ―』（1984、増田義郎；山田善郎；染田秀藤・編、世界思想社）、『中級スペイン文法』（1995、監修、白水社）、『スペインの言語』（1996、監修、同朋舎）、R. Lapesa 著 *Historia de la lengua española* (1942¹; 1981⁹) の邦訳『スペイン語の歴史』（2004、監修、昭和堂）のような、スペイン語をよく知る読者を対象とした書籍の編集・監修に携わっておられる。

山田先生は、スペイン語・スペイン語圏文化の研究教育にこのように多大な貢献をされた。これに対して 1986 年、スペイン国より Cruz de Oficial de la Orden del Mérito Civil が授与され、また、2002 年には我が国の勲二等瑞宝章が授与された。

先生は、天性の直観で教え子一人ひとりの特性を見抜かれ、決してプレッシャーを与えることなく、伸び伸びと育ててこられた。研究室で、あるいは喫茶店で、ソファに身を沈め、コーヒーを味わいながら、笑顔を絶やさず、愉快で、しかも含蓄のある話題を語ってくださる先生のもと、どれだけ多くの教え子が、学ぶ喜びを学び、知る楽しさを知り、各方面へと育っていったことだろう。

百歳のお誕生日を目前にして、先生の若々しさ、快活さは変わることがない。ある時、先生は、恩師を慕う卒業生たちの招きを受け、東京で開かれた同窓会に、遠路を苦にされることなく参加された。会場に到着された先生に向かって、遥かに年下の卒業生が、こう問いかけた。「おい、君、誰やったかいな。何年度の卒業や？」 師、ほほえみて曰く、「あんた何ゆうてんねん。ぼくや。山田やがな。」

¡Juventud, divino tesoro, que nunca abandone al profesor Yamada y permanezca siempre con él!

山田善郎先生、百歳のお誕生日おめでとうございます。多年にわたる学恩に対し厚く御礼申し上げます。どうぞますます若々しくお元気で、一同をお導きください。

2026年7月27日しるす

* 本稿作成に当たり、長谷川信弥 本学会会長・大阪大学教授ならびに土井裕文 関西外国語大学教授より、詳しいご教示を得ました。記して謝意を表します。また、以下の文献を参照しました。ただし文責の一切が筆者にあることは言うまでもありません。

中岡省治 (1986). “Dedicatoria al profesor don Yoshiro Yamada”, *Lingüística Hispánica* 9, p. 3-7. 関西スペイン語学研究会 / 山田善郎 (1978). “Prólogo”, *Lingüística Hispánica* 1, p. 1-2. / 山田善郎 (2003). 「巻頭言」、『会報』5, p. 1-2. 日本イスパニヤ学会 / 吉田秀太郎 (1992). 「山田先生の御退官に因んで」、*Estudios Hispánicos* 17, p. 1-3. 大阪外国語大学イスパニア語研究室。

* * なお、拙文 “Celebrando el cumpleaños 100 del profesor Yoshiro Yamada” を *Lingüística Hispánica* 48 (関西スペイン語学研究会) に掲載しました。

(ふくしま・のりたか 神戸市外国語大学名誉教授)

【エッセイ 9】

劇団クセック ACT 最終公演「ドン・キホーテ」との出会い

田林 洋一

2025年11月19日、所縁あって劇団クセック ACT の最終公演を観覧しました。浅学菲才ゆえにこの劇団の存在をそれまで知りませんでした。天理大学名誉教授の片倉充造先生より同年9月5日に静岡県立大学で開催された京都セルバンテス懇話会での発表の機会を頂いたことがきっかけで、知己を得ることができました。

その時までに私は『『ドン・キホーテ』に潜む狂気』と『ドン・キホーテとフィクションのアウトサイダーたち』（共に水声社）を上梓しておりましたが、拙著に目を通してくださった片倉先生が、「今度、『『ドン・キホーテ』とともに』という本を出すので、1章を書いてみないか」という嬉しいお誘いをしてくださいました。元々スペイン語学で博士号を取った身でありながら、『ドン・キホーテ』の著作を出版するには多大な勇気と覚悟が要りましたが、恥はかき捨てとばかりに1章の執筆と発表をさせていただくことになりました。因みに、中身の出来はさておいて、上記2拙著については好意的に受け取ってくださった方がいらっしゃった半面、「門外漢の癖にドン・キホーテの本を出すなどけしからん」「お前のやっていることはサッカーにラグビーのルールを持ち込んで暴れまわるようなものだ」といったご批判を頂戴したことも告白しなければなりません。

台風が直撃して大荒れの天気の中、京都セルバンテス懇話会の全国大会の発表を何とか

こなしで一息ついていると、ダンディな紳士が声をかけてくれました。その紳士こそ劇団クセック ACT の代表の神宮司啓氏で、拙著に目を通してくださっていました。感動のあまりしどろもどろの応対になりましたが、神宮司氏から、この劇団が2025年で休止するので最終公演を東京で行うから来てみないか、とのお誘いを受けました（因みに、神宮司氏の講演の詳細は京都セルバンテス懇話会（編）『スペイン学』第28号に掲載されています）。専門外の『ドン・キホーテ』に首を突っ込んだおかげで、天理大学の橋本和美先生をはじめとたくさんのお会いが生まれましたが、この出会いもその「素敵な邂逅」のひとつです。

予習のつもりで YouTube に上がっていた劇団クセック ACT の動画を拝見していたものの、実際の公演は衝撃的でした。まず、ドン・キホーテが車椅子で登場。そして、白いジャケットスーツを着て粋な黒い帽子をかぶっているやくざな男がサンチョ・パンサ。ガタピシとした巨大シーソーまで登場し、3人の百姓娘は自転車で舞台を所狭しと駆け回ります。こんな現代流で奇想天外なドン・キホーテの表現方法があったとは、と驚愕しきり。それでいて、しっかり「ドン・キホーテ」しているのです。

朗々と、時には小声で紡がれる台詞の数々に聞き惚れながら、ああ、この箇所は『ドン・キホーテ』のあのエピソードだな、こちらはこの逸話だろうか。後篇のことも入っているな、と分かる舞台構成も見事でした。あの長い『ドン・キホーテ』を僅か2時間の舞台にどうやってまとめるのだろう、という現実的な疑問も湧きましたが、素人のそんな心配も吹き飛ばすほどの怪演・狂演です。関西外国語大学で教鞭を取っておられた田尻陽一先生が脚本や翻訳を担当されたとのこと、さすが、と唸るあっという間の2時間でした。公演が終わって火照った身体と気持ちを冷やそうと外に出ると、スタッフの方に呼び止められました。私（田林）のことは神宮司氏より聞いている、ついては何か一言ご意見を、とマイクとカメラを向けられました。著書を出版したとはいえスペイン文学やドン・キホーテについては私は疎く、先達の先生方がたくさんいる中でしたが、それでもたどたどしく、しかし熱に浮かされたように情熱的に話をさせていただきました。

以前にスペインで公演された時も、劇団クセック ACT のメンバーは全て日本語で通して演じられたそうです。狂的なまでの演劇の勢いは言葉の壁を容易に跳び超えます。このような素晴らしい劇団が昨年で45年の幕を下ろしてしまったのは非常に残念に思えました。どこかで復活ライブでもやらないだろうか、と関係者の方々の多大なご苦勞も知らずに素人は呑気に夢想しています。

（たばやし・よういち 東北大学准教授）

Complutense の英文学教授 Leopoldo Durán 神父 (1917-2008) が私の仮寓近くにお住まいだったことから、折に触れて雑談をさせていただいた。神父は Complutense で哲学、ローマの聖トマス・アクイナス神学大 (Angelicum) で神学、ロンドンの King's College で文学、と 3 種の博士号を取得しておられた。英国での学位論文は、日本でも翻訳の多い Graham Greene における司祭像で、同神父が一貫して追求したテーマだった。原著者の無二の友として La Mancha や Galicia 地方を 15 回も二人でお忍びの旅をし、Greene がスイスで他界する際には枕元に呼ばれ、司祭として最期を看取っておいでだ。

その Durán 神父と雑談をしていたある時、突然「君は Robles Dégano の *Filosofía del verbo* を読んだかね？」と尋ねられた。英文学者にかような書物について尋ねられたことに意表を突かれながら、精読していないし内容もよくは覚えていないが、特異な論述が興味深かったとお答えした。神父から「それはよかった」とだけコメントが返ってきた。

こんなことをたまたま思い出して、久しぶりに Robles Dégano の著書を渉猟した。言語学の素人でしかない私の認識不足かとも思うのだが、日本の言語研究者で、この「古い」研究者を振り返る人は、ほとんどおいでにならないようだ。自然科学ならいざ知らず、人文系にあっては先端研究が最良である保証はない。昔の研究に見られる用語の不備をはじめ、各種異議を唱えることは、さして難しくないのかもしれないが。前掲の *Filosofía del verbo* (verbo はラテン語原義) の巻頭言にある “esta importantísima rama de la Filosofía, sin la cual las cuestiones gramaticales no tienen solución.”¹ などは、のっけから唾棄されてしまいそうだ。本書の 16 年後に刊行された初等教育教師向けの *El alfa de la gramática castellana para los niños de las escuelas primarias* では一層鮮明に “en armonía con los principios de la Filosofía Escolástica.”² と言う。子供を導くには、原点となる昔の哲学者に想いを馳せよとの立場だ。

主著の *Filosofía del verbo* はともかく、Robles Dégano が言語論者として大きく踏み出したのは *Ortología clásica de la lengua castellana, fundada en la autoridad de cuatrocientos poetas* で、Menéndez y Pelayo への献辞と文言と共に、書簡形式による Menéndez y Pelayo の称賛序文が冠されている³。RAE による査読が高評価だったこともあり、文部美術省副長官は「官報」に讃辞を寄せ、古典学に通じた著者が文法と発音を的確に説いているとした⁴。

Robles Dégano の言語論で、別の意味で注目されたのが 1912 年の *Disparates gramaticales de la Real Academia Española y su correccion*, Madrid だ。本書は RAE の文法書最新刊 (1911 年) のうち、自分の理解と齟齬する箇所を約 90 ページにわたって指摘したもので、序文の “La Gramática oficial es un atentado contra la Lengua castellana y contra la razon” からして、その対決姿勢がうかがえる。だが翌々年には論客 Georges Cirot によって、その批判が根本的な錯誤に基づいている旨、指摘される⁵。

私の無理解もあろうが、昨今の研究が特定課題の到達点を示そうと性急になりがちなのに対し、Robles Dégano から伝わるのは、テーマの深層をじっくりと探り、未知あるいは不鮮明な領域に分け入りながら一定の光明を得ようとする姿勢だ。結果的に読者は単に「知る」、「了解する」よりも、問題領域を厳粛な私事として受け止めるよう導かれる。

ここで本稿を方向転換させなくてはならない。日本を眺望した Robles Dégano だ。昨年、自分のつましい書庫をかき回していると傷んだ小さな本が出てきた。*Vida y martirio de San Pedro Bautista*、副題は *Religioso descalzo de la orden de San Francisco y embajador de España en el Japón*、出版は Madrid で 1927 年。跣足フランシスコ会士で日本に派遣され、1597 年に長崎で殉教した聖ペドロ・バウティスタについてだ。著者名に D. FELIPE ROBLES DÉGANO, Pbro. とある。本書をいつ、どこの古書店で入手したのか記憶にないどころか、著者が上述の言語論者であるとは、当初、結びつけることもできなかった。

Ávila 生まれの Robles Dégano が Salamanca 大学で神学を修め、10 年ほどイエズス会に所属後、1939 年 4 月に他界するまで故郷でアウグスティノ会修道女たちの指導をしたことを思えば、宗教関連の書に手を染めるのは順当と言える。同著者の約 300 ページからなる *Gramática general aplicada a la lengua castellana o El Alma del Idioma Castellano*, Ávila, 1922⁶ に冠された献辞は同郷の Santa Teresa de Jesús に捧げられ、当人の肩書は Ávila 教区神学校哲学教授となっている。

スペイン文化史のなかで、直接体験せずに日本をそれなりに語るのは Lope de Vega, Baltasar Gracián を好例に特異なことではない。宣教師たちが発信した書簡はもとより、時の流れからしても Lope や Gracián 以上に日本を知る手段が Robles Dégano にはあった。なにかずく殉教に関わる事項はキリスト教精神史で刮目事項だった。人名や地名表記に不正確な箇所が散見するが、それが著者の転写によるのか、日本発の原文によるのかは不明だ（秀吉の前名・羽柴が Fajiba など⁷）。

本書には史実の客観性とは別に、2 つの大きな特徴がある。その一つは事項の克明な描写だ。「宗教者と信者の耳と鼻を切った上、周囲の主だった町村を晒し回った後、磔刑に処する旨の裁きが 12 月 29 日の日曜に下された」⁸、「1 月 3 日、金曜日、後ろ手に縛られた 24 名の囚人は (...) 一人ずつ左耳半分を処刑担当者に削がれた」⁹、「1597 年 2 月 5 日午前 11 時から 12 時の間」¹⁰ 等々、枚挙にいとまがない。

もう一つは語り手としての著者だ。本書がフィクションというのではない。マニラと日本の間だけでほぼ一ヶ月を要した¹¹ 遠い日本で殉教した San Pedro Bautista (その他の殉教者) の生きざまはドラマ以外の何ものでもなく、Robles Dégano はそれを克明に辿った。これは言語現象を自分なりに凝視して見極めようとした姿勢に通底する。本書巻末に San Pedro Bautista への感動的な “Novena”¹² が付されていることが、両者最大の相違かも知れない。

[引用箇所の太文字・小文字、強勢記号の有無は原表記に従う]

¹ 1910 年初版。引用は Madrid, 1931, segunda ed. enteramente reformada, “RAZON DE ESTA OBRA”, p.7. 同じく “los principios de la Gramática están en la Metafísica y en la ciencia de la Interpretación”, A. Bello, *Gramática de la lengua castellana*, edición anotada de Robles Dégano, Madrid, 1921, p.452. M.L. Calero Vaquera y A. Zamorano Aguilar, “Felipe Robles Dégano (1921) y sus comentarios a la GRAMÁTICA de Andrés Bello”, *Anu. Let.*, 42-43 (2004-2005) p.106, 107, 114, 119. この論文では後者の典拠を厳密に明示せず Prólogo とだけするが、上記のように Robles Dégano の Prólogo, p.452.

² Madrid, 1926, p.3.

³ Madrid, 1905, それぞれ p.III, pp.V-VI.

⁴ *Gaceta de Madrid*, 118(1906, 28-IV), tomo II, p.379. 報告書で Robles Dégano の名が 19 回言及されていることから副長官の思い入れが察せられる。スペインの「官報」は刊行開始の 1661 年以来、幾度となく呼称変更されたが、1697 年から 1934 年 3 月 31 日までの長期間 *Gaceta de Madrid*、その後再度、幾度か呼称変更されて 1986 年 7 月 24 日以降、今日の *BOE (Boletín Oficial del Estado)*。

⁵ *Bull. hisp.*, 16-1(1914), p.130. Cirot は同誌 13-4 (1911), p.501 で Robles Dégano の音声論を批判。批判への Robles Dégano の見解は前掲 “RAZON DE ESTA OBRA”, pp.5-6 と本文 pp. 215-216。同じく次を参照。M.L. Calero Vaquera, “Un capítulo en la historia de las críticas a la RAE: los disparates académicos según F. Robles Dégano (1912)”, *Actas del V Congreso Andaluz de Lingüística General*, Granada, II (2006), pp.877-886 と R[amón]. R[obles Rodríguez]. の書評 *El lenguaje. Revista de Filología*, I-5 (1912), pp.134-137. この *Revista de Filología* と R. Menéndez Pidal の名を冠して 1914 年発刊の *Revista de Filología Española* は別。前者に関しては María Pilar Perea Sabater の検証 “La revista *El lenguaje* (1912-1914). Autores e ideologías lingüísticas”, *BSEHL*, 17 (2023), pp. 215-239.

⁶ 本書序文でも指摘した文法と形而上学との連携を強調。“yo, conociendo que la raíz de las cuestiones gramaticales está en la Metafísica”, Primera parte, Prólogo, p.IX.

⁷ p.30. Giovanni Botero(c.1544-1617) の著名な *Delle relazioni universali* (1591/1618), Venetia, 1612 [Parte Seconda, Lib.III] では “Faxiba” が一回、それ以外は *Fassiba* (*s larga* の歴史的綴り) pp.82-83, 123, 124-5 他; 同書西訳 *Relaciones universales del mundo*, Valladolid, 1603, pp.162-163、英訳 *Relations, of the most famous kingdoms and commonweales thorough the world*, London, 1611, pp.410-411 等でも *s larga*。

⁸ *Vida y martirio...*, *op.cit.*, p.83.

⁹ *ibid.*, p.85.

¹⁰ *ibid.*, p.114.

¹¹ *ibid.*, p.30.

¹² *ibid.*, pp.I-VI.

(しみず・のりお 上智大学名誉教授)

【エッセイ 11】

canoa に次ぐアメリカニスモ：辞書学的覚書

安達 直樹

RAE y ASALE の *Diccionario histórico de la lengua española* (DHLE) が、世紀を越えて一応の全巻 (7000 項目以上) 出版をみた。この経緯については機関による紹介によって概要を知ることができる。ここでは DHLE に収載のない一つの語の歴史を考えてみたい¹。

近年 RAE が進める史資料のデジタル化事業の中に、いわゆる *Diccionario de Autoridades* (1726-1739) (以下 DA) の、第二版のための準備草稿がある (これも DHLE の源泉の一つ)。筆者はこの中に、初版になく第二版で登録される予定であった語 “Guañin” (タイノ語起源か) が「ネブリハの辞書」を典拠としていることを見出した。周知の通り、スペイン語史上初のアメリカニスモはネブリハの *Vocabulario español-latino* (c. 1494) (以下 VEL) における見出し語 canoa であるとされ、従来これはネブリハの辞書唯一の新世界由来の語彙と考えられてきた。新世界到達の第一報 (コロンの王室計理官宛て書簡、1493 年 4 月出版) から間を置かずスペイン語に取り込まれた canoa とは対照的に、guañin (同書簡中の「金」は一貫して oro) は辞書学的にほとんど顧みられることがなかった。*Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico* はこの語の初出を、“isla de Goanín, Colón, 13-I-1493.” としている。コロンの *Diario de a bordo* (以下『日誌』) は、同日の出来事を次のように記している：“Llamaba al oro tuob (中略) dijo de la isla de Goanin, adonde hay mucho tuob.” この Goanin には『日誌』をまとめた Bartolomé de Las Casas 神父が “Este Goanin no era isla segun yo creo, sino el oro bajo, que segun los indios de la Española (中略) llamaban Goanin.” との注釈を付けている。『日誌』は加筆されて大著 *Historia de las Indias* に組み込まれたが、当該箇所には、“cierta especie de oro bajo que llamaban guanín” との文言が加わっている。この書の執筆時期 (50 年代) には、他の報告書等から guanin = 金は相当に認知されていたものと思われる。また、『日誌』では tuob 等複数の先住民語で言い表された「金」は、いまや guanin に統一されている (綴りは複数ある) ことにも注目したい。

guanin が記録された同時代の史料に、第二・三次航海に随行、インディオの宗教や習俗を記録した Ramón Pané 修道士による報告書がある。彼は 1498 年頃、同報告書を提督コロンの提出したとされるが、筆者はこれを「金」を表す guanin の初出文献と考えたい (CORDE では 1498 年の第三次航海にまつわる著者不詳の文書が最古)。1571 年には、コロンの息子 Fernando が自著 *Historia del Almirante* に Pané の報告書を原典のままに収録した。一節を抜き出そう：“Y los guanines los llevan en las orejas, que se las agujerean cuando son pequeños, y son de metal casi como de florín.” さて、コロンの書簡 (1493) や Pané の報告書等に触発され、新大陸の歴史をまとめたのが、スペイン宮廷に仕えたイタリア人ウマニスタ、Pedro Mártir de Anglería である。その 1511、1516 年の著作 *De Orbe Novo Decades* (以下 *Décadas*) の刊行は、他ならぬネブリハが editor として主導したものである。その中に「彼らがグアニンと呼ぶ首

飾りは、金よりもむしろ真鍮のような合金で巧みに作られていることが分かった」との記述がある。金を産出する島の名は、耳や首の金飾り、それに純度の低い金となって書きとめられたのである。

lexicológico 語彙論の視点からは、以上を guanin の幼少期ということにしておきたい。次に、lexicográfico 辞書学的に見ると、*Nuevo tesoro lexicográfico de la lengua española* では、この語 (guañin の形) の最も早い登録は Oudin (1607) の西仏辞典である。他方、RAE の辞書としては 1803 年版が最初だが、先述の通り、DA 第二版草稿の中にこの語を見出せる：“Guañin. adj. Se aplica al oro baxo de ley: (中略) Nebrix. Vocab. en la pal^a. electrum naturale.” ここで典拠とされた “Nebrix. Vocab.” はどの辞書か。guañin はラテン語語彙の対応語であるが、その見出し語は *Diccionario latino-español* (1492) (DLE) 初版にはなく、1512 年の増補版で初めて現れ、guañin がその説明に充てられる：“Electrum naturale. por el oro que llaman guañin.” 他方、1513、1516 年の VEL には guañin は収載がない。そこで、RAE の Fichero General で guanin を検索すると、その ficha の一つ (#35) に、DLE (1512) と同じ Electrum naturale の定義とともに “1514 NEBRIJA” と記されている。DA 第二版は DLE (1512) ではなく 1514 年の “Triplex 版” (羅西と西羅の合本版) に依拠した可能性が高い。同辞書から RAE は guanin をもう一件見出している (#22)：“Aurum coronarium. por el oro que llaman guanin.” これは DLE (1512) にもすでにあり、語順の転倒した Coronarium aurum も確認できる。さらに重要なことに、ficha (#18) からは、ネブリハが 1506 年の法律用語辞典 *Lexicon Iulis Civilis* (LIC) で早くもこの語を用いていたことが明らかである。すなわち、Aurum coronarium 「王冠用の金」は「最近発見されたインディアスの島々から運ばれるあの金のこと。(中略) guanin と呼ばれる金」と定義される。これが十年後、*Décadas* にネブリハが付録した、史上初のアメリカニスモの語彙集と言うべき *Vocabula Barbara* では「胸飾り」の語義を与えられている (“Guanínes sunt bullae aureae pectorales”)。LIC の校訂版をものした Perona (2000) は同辞書の guanin を「アメリカニスモの導入」例と明記している。管見の限り、これはネブリハが記録した canoa 以外の新大陸語彙に関する唯一の指摘である。ただし Perona は、1512 年以降の辞書における収載には言及していないものとみられる。guanin/ guañin はその後、1520、1528、1533 年の Triplex 版では前掲の三つのラテン語句に対応する語であり続けた。辞書学上の転機は 1536 年版 (ネブリハの死後、息子らによる出版) で、初めてカスティーリャ語の見出し語 oro guañin が登録された：“Oro guañin, electrum naturale appellatur.” 当時この語が一定程度普及していたことは、*Décadas* や Carlos II の勅令 (1519)、後の Fernández de Oviedo の著書等からも裏付けられる。Oro guañin は、筆者の見た限り少なくとも 1540 ~ 1800 年の 12 の版で見出し語の地位を保持した。

以上が、ネブリハの辞書、そしてスペイン語史における guanin の最初期の記録である。惜しむらくは、DA 第二版が未完に終わったために、RAE によって掬い取られていたネブリハの guanin がその後長く忘却に付されたことである。

紙幅は尽きた。辞書のように簡潔に、なぞかけで締めたい：辞書 (DHLE) とかけて、金 (oro guañin) ととく。そのころは、宝 (tesoro) なり。

¹ 参考文献等は、拙稿 (印刷中) : “La voz *guanin* o *guañin* en los diccionarios nebrisenses. El segundo americanismo en la historia del léxico español”, *Lingüística Hispánica*, 48 を参照されたい。

(あだち・なおき 神戸市外国語大学准教授)

【エッセイ 12】

Memoria y Linaje: La Digitalización del Archivo Histórico del Antiguo e Ilustre Solar de Tejada

Erik Andrés Reynoso Márquez

En la tradición de las casas nobiliarias, el archivo no es solo un repositorio de documentos, sino el legado documental de la identidad colectiva. Al igual que los Kakeizu (系図) japoneses servían para preservar la legitimidad y el estatus de las familias samurái, el Antiguo e Ilustre Solar de Tejada ha servido durante siglos como guardián de la memoria de los descendientes de sus señores. Como señor de este linaje y Casa Solar, cuya fundación histórica y legendaria se remonta al año 844, doy fe que nuestra institución, la corporación nobiliaria más antigua de España, permanece vigente hasta hoy. Cabe destacar que el Solar de Tejada es la única corporación histórico-nobiliaria española con reconocimiento oficial por parte del Estado, al haberse publicado en el Boletín Oficial del Estado (BOE) la confirmación del derecho de uso del escudo de armas para sus Señores Caballeros Hijosdalgo.

De acuerdo con la tradición, el Solar nació durante la Batalla de Clavijo, cuando Sancho Fernández de Tejada, héroe de la Reconquista, obtuvo del rey Ramiro I el privilegio de armas y nobleza, concediéndole el señorío de Tejada a él y a sus descendientes, por línea masculina y femenina. Tal es la naturaleza singular de nuestra institución que los señores nos concebimos como una gran familia donde el linaje común prevalece sobre cualquier distinción de título o estatus socioeconómico; en Tejada, donde coinciden desde monarcas (como la recordada reina Fabiola de Bélgica) duques, marqueses, condes y Grandes de España, hasta los que únicamente somos señores, cobra pleno sentido el histórico espíritu fundacional de: «Todos somos iguales».

El 29 de mayo de 2026, en Madrid, se presentó formalmente la digitalización del Archivo

Histórico del Solar de Tejada. Gracias a la visión de los señores de Tejada, Don Fernando de Herrera Hume y Don Agustín Ponce Figuerero, investigadores y descendientes pueden acceder a siglos de registros genealógicos y nobiliarios desde cualquier lugar del mundo a través del portal institucional

(<https://buscador.solardetejada.es/search.php>).

Este proyecto, realizado con el apoyo de la Real Asociación de Hidalgos de España, trasciende la labor académica: constituye un acto de salvaguarda del patrimonio universal. Dado que el Solar de Tejada cuenta con la protección del Gobierno de España y fue declarado Bien de Interés Cultural (BIC / Jūyō Bunkazai - 重要文化財) en 2016, esta digitalización asegura que un pilar fundamental de la historia española permanezca inalterable frente al paso del tiempo.

Para el estudioso de la historia japonesa, el Solar de Tejada ofrece un punto de comparación de gran rigor analítico. Mientras que el sistema moderno de registro civil japonés (Koseki), introducido durante la era Meiji, se estructuró como un marco administrativo de control poblacional por parte del Estado, los archivos del Solar de Tejada priorizan la preservación del linaje histórico y la filiación de la sangre. Al igual que las familias nobles japonesas custodiaron celosamente sus Kakeizu, la digitalización del Solar de Tejada es una acción en defensa de la memoria institucional. Su designación como Bien de Interés Cultural subraya la importancia de conservar la evidencia documental primaria, garantizando su accesibilidad, inmutabilidad y permanencia.

La apertura digital del archivo representa un paso decisivo en la conservación del patrimonio histórico. En sintonía con la alta estima que Japón guarda por la memoria de la «casa» (ie - 家) como pilar fundamental del linaje y la tradición, esta labor reafirma la importancia de la disciplina académica como herramienta universal para salvaguardar la integridad del pasado frente al olvido.

(エリック・アンドレス・レイノソ・マルケス テハダ領主)

【書評 1】

Noritaka Fukushima, *Modo y modalidad: Estudio contrastivo entre el japonés y el español*. Madrid: UAM Ediciones, 2025.

山村 ひろみ

本書は、マドリード自治大学が刊行している日本語・日本文化に関するシリーズ Colección Japón の第 10 巻である。周知のように、著者の福嶋教隆氏は 2019 年に『スペイン語のモードとモダリティ — 日本語との対照研究の視点から —』（くろしお出版）を出版しているが、本書は同書の増補改訂版に留まるものではなく、そこには、同書刊行以後の最新の研究動向およびその書誌情報、前著とは異なる資料・データが惜しみなく提示されている。また、本書の巻末には、前著にはなかった専門用語の解説（glosario）と、日本語の用例に付された略語を説明したリストも備えられている。さらに本書には、同じく前著にはなかったアメリカスペイン語（español americano）に見られる叙法選択のあり方を論じた 1 章（Capítulo 12, pp. 189-200）が追加され、全体で 13 章からなる構成になっている。以上のことから、本書が前著を大幅にバージョンアップしたものであることが容易に察せられるが、くしくも前著の書評も担当した評者が考える本書の特筆すべき価値は、以下に示す点にある。

何よりも注目したいのは、“Capítulo 4. Nueva propuesta sobre las funciones del modo verbal” (pp. 65-92) である。同章は前著の「第 4 章 叙法の機能に関する新たな提案」に対応するものだが、その内容は前著に比べよりの確で、質量ともに充実したものとなっている。まず、叙法の機能に関する新たな提案を行うにあたり、福嶋氏は文の構造（estructura oracional）を次のように提示しているが、これは前著にはまったくなかったものである。

Oración = [M1[M2[M3[P]]]]

(M1: Modalidad de la enunciación, M2: Modalidad alta del enunciado, M3: Modalidad baja del enunciado, P: Proposición) (p. 65, (25))

上の図によれば、文は命題（proposición）を覆う 3 つのモダリティの層（tres estratos de modalidad）からなることが分かるが、本書において modalidad は “manifestación lingüística de la actitud o la intención del hablante en relación con el contenido de lo que enuncia”、さらに、M1 は “modalidad de la enunciación”、M2 は “modalidad alta del enunciado”、M3 は “modalidad baja del enunciado” と定義づけられている。このうち M1 はいわゆる聞き手目当てのモダリティで、modalidad (= mod.) declarativa, mod. interrogativa, mod. exclamativa, mod. imperativa がある。一方、M2 は話し手の発話内容に対するモダリティで、mod. epistémica (= epis.) determinativa, mod. epis. dubitativa, mod. epis. evaluativa, mod. epis. optativa がある。最後の M3 は、文の内容には関係するものの命題の真偽判断は表さないモダリティで、modalidad

semiproposicional がある。本書はこのような文のモダリティの層を分類した上で、スペイン語の叙法選択の規則 (p. 70, 表 9) を提示する。同表にあげられた規則は [A] ～ [E] の 5 つからなり、これは前著の 3 つよりも多い。

規則 [A] は、直説法は M2 に、接続法は M3 に位置づけられる、とする。規則 [B] は、発話 (enunciación) の観点からは接続法が有標であり、直説法は無標である、とする。規則 [C] は、文において、事態の真偽価値を決定し、その判断を聞き手に伝える *modalidad epistémica determinativa* を表す動詞は直説法の形式を取る、とする。規則 [D] は、文において、*modalidad optativa*, *modalidad epistémica dubitativa o evaluativa* の導入辞によって選択され、事態の真偽価値を決定せず、それを聞き手に伝えない動詞は接続法の形式を取る、とする。規則 [E] は、規則 [B] と規則 [D] の下線部 (*modalidad epistémica evaluativa*) は主に現代のヨーロッパスペイン語で有効である、とする。

このように、「文は命題 (*proposición*) を覆う 3 つのモダリティの層 (*tres estratos de modalidad*) からなる」という文の構造の規定、およびそれを十分に応用したスペイン語の叙法選択の規則の精緻化により、福嶋氏のスペイン語の叙法選択に関する主張はより明確で確固としたものになったといえる。例えば、前著では、スペイン語の用例には日本語のグロスと日本語訳が付されていただけであったが、本書ではスペイン語の用例のほとんどに、当該文の各要素が 3 つのモダリティ層のどれに対応するかが明示されているため、その構造上の分析 (モダリティの階層の違い) がより分かりやすくなっている。また、日本語で書かれた前著において「『事実だと断定し、聞き手に向けて主張する』働きをする動詞は、発話レベルにおいて無標の叙法である直説法で表される」とされた規則の「断定」がスペイン語の *determinar*、「主張」が *informar* に対応するものであることが示されたおかげで、用語上の誤解を避けることもできるようになった。さらに、「『願望』『疑惑』『前提事実』などを表し、『事実だという断定・主張をしない』働きをする叙法導入辞に導かれる動詞は、発話レベルにおいて有標の叙法である接続法で表される」とされた規則の中の「前提事実」が、スペイン語では “(*modalidad epistémica*) *evaluativa*” という語句で表されることになった点も、他の叙法導入辞との意味的整合性からもより有効に思われる。

以上は、本書において指摘すべき長所のごく一部である。しかし、評者は、本書の核をなすと思われる第 4 章において、福嶋氏がより考察を深め、スペイン語の叙法選択の規則に関して前著には見られなかった新たな提案を行ったことに、とりわけ感銘を受けた。スペイン語学の大先達である福嶋氏の背中を、これからも少しでも追っていきたいと思う次第である。

(やまむら・ひろみ 九州大学大学院言語文化研究院特任研究者)

【書評 2】

ファン・ルルフォ『^{おうごん}黄金の^{しゃも}軍鶏』(1980年、杉山 晃訳) 国書刊行会 2026年

片倉 充造

アスエラ、アレオラ、ヤネスと同じくメキシコ中部ハリスコ州出身のファン・ルルフォ(1917~86)の文学作品については、『燃える平原 (*Llano en llamas*)』(1953、杉山訳 1990、2018) や『ペドロ・パラモ (*Pedro Páramo*)』(1955、杉山・増田義郎訳 1979、1992) がすでに出版されている。メキシコ地方社会の様相を接写して描いた表題作は、もともと映画用のプロット(1959)として書き著わされ、通常の短編小説とは別物とされてきた。1980年に改めて文学作品として刊行された名品であり、その邦訳書の表紙・装幀画(ソンブレロに立派な口髭姿の浅黒い男が、よく手入れされた軍鶏をそっと抱き抱えている)は象徴的にして雄弁である。あの《ラテンアメリカ文学ブーム》を担った「'82年ノーベル賞」作家コロンビアのマルケス(青年時にはローマの実験映画センターに学び映画監督を志向/中編「大佐に手紙は来ない」(1961)での退役将校は、亡息の形見として常に闘鶏に留意)や、「'87年セルバンテス賞」フエンテス他が積極的に脚本化した同名映画作品(1964)を、今ではネット画面で鑑賞できる。

「闘鶏」と聞けば、評者にはおおよそ大阪中東部・河内^{かわち}地方を題材とした、ルルフォと活躍期も近い今東光『河内風土記』(1960)や『河内カルメン』(1965)が想起される(紀行書『南米耳袋 - 和尚ラテンアメリカに行く』、1962も興味深い)。

ルルフォの表題作は、1959年に書き上げられた全120頁ほどの言わば、中編小説である。メキシコの田舎町(サンミゲル・デルミラグロ)在住の貧者ディオニシオ・ピンソン(主人公)が、地元での「お触れ屋」(5頁、pregonero:触れ役、地元広報の口上担当)から、闘鶏場の「呼び手」(11頁、gritón)に転身する。そして勝負に敗れた黄金の軍鶏をもらい受け、丁寧に介抱を続けて再生させ、やがて母親の死後それを生業^{なりわい}の糧^{かて}とする。「本作はディオニシオの栄枯盛衰を描きながら、その背後に横たわる宿命や目には見えぬ運命の鎖を、そっと浮かび上がらせようとする。」(130頁、「訳者あとがき」)のとおり、主人公は、闘鶏界の顔役ドン・ロレンソ・ベナビデスや、歌手ラ・カポネーラ(ベルナルダ:後にディオニシオの妻)との出会いから、この闘鶏の世界でやがてのし上がっていき、そして結末を迎える。

この邦訳は一気に読み進むことができる。原作叙述量のうち会話(対話)部分が適度に配置され、そのうえ改行も多く見られる(『ドン・キホーテ』全訳に際し、スペイン文学者牛島信明氏も、「やはり読みやすさを考慮して、原文より行変えを多めにした。」と解説で記載)。そして作品全体の雰囲気にも、どこかユーモアや温み^{ぬく}がある。加えて展開・構成が面白い。展開上の飛躍がないように、地の文(語り手)が筋^{アクション}の流れを補足説明してくれる。邦訳「どう見たって、あんたはこの世界のことをわかっちゃいないわね。まあ、場数を踏めばそのうちわかるようになるさ。勝負の世界じゃ、何でもありなんだから」(40頁、ラ・カポネーラ)はこの業界の有り様をすでに物語っている。「田舎で何をやってた?訊いても

いいんなら教えてくれ」「普通に働いてたさ。何とかやってた」「食うや食わずだったんじゃないのかい？おれには相手の^{つら}面を見りゃだいたいのがわかる。悪いけどな、あんたは、(略)、だから、楽な稼業を探す。この軍鶏のがそれさ。座って待ってりゃいい。ツキが巡ってきておまんまが食えるってもんだ」(59 頁) との顔役ドン・ロレンソとピンソンの台詞の掛け合いは、名訳(名文)そのものであろう。既刊の『燃える平原』(杉山訳)の自然で熟^{こな}れた口調の会話を彷彿させる。外国(語)映画作品で譬^{たと}えれば、“吹き替え”の定番のような馴染みがあり、原作者のルルフォと訳者とが共鳴・一体化していると考えられる。当時の闘鶏業界の裏面(秘技)のみならず、カード遊びの隠語等についても多く提示され、滑らかな翻訳で綴られている。円滑な翻訳は、得てして難渋な作業を伴うものであろう。

メキシコは映画作品についても高質であり、同名映画作品〈黄金の軍鶏〉(1964)では、主演にイグナシオ・ロペス・タルソ、相手役には歌手・俳優ルチャ・ビリャが配されている。ロペス・タルソと言えば、同じく地方(中西部ミチョアカン州)の貧民を中心人物としたホセ・ルベン・ロメロ『ピト・ペレスの自堕落な人生(*La vida inútil de Pito Pérez*)』(1938、小沢 2000、行路社)があるが、1970 年版同名映画〈ピト・ペレス〉でも、主役を演じている。この名優はルルフォの表題作も含め、ブルノ・トラベン『白いバラ(*La rosa blanca*)』(1929)の同名映画作品(1961)にも主演していることから、メキシコナショナリズム・人権意識の高い、社会派の表現者ということになるだろう。

主役ディオニシオの職業「触れ役」(pregonero)は、おそらくスペイン・作者不詳『ラサリーリョ・デ・トルメス』(1554)のラサロにも繋がるものだが、「闘鶏」を「闘牛」に置き換えてみると、同じく映画化(1941、他)され闘牛士の一生を描いた、バレンシア出身の作家ブラスコ・イバニェス『血と砂(*Sangre y arena*)』(1908)の結構とも近いと言えるだろう。『ピト・ペレス』は、メキシコ・中南米を代表するピカレスク小説であり、このルルフォの『黄金の軍鶏』を、主役ディオニシオやラ・カポネーラ(ベルナルダ)のたどった生涯も含め、ピカレスク作品(生計を求めて域内を転住する貧民の物語)として読み解くことも可能かも知れない。

「メキシコ革命小説」(近代歴史小説)の名作、マルティン・ルイス・グスマン『ボスの影』(1929、寺尾隆吉訳 2020)についての書評(『スペイン学』25 号、論創社、2023)でもそう述べたが、現地メキシコの簡単な関係地図が補足されれば、さらに日本語読者には作品理解の助けとなるだろう。総じて本書『黄金の軍鶏』は、『ラテンアメリカ文学ブーム』の主要作家たちが特に注目した作品であり、後年「メキシコ国民文学賞」(1970、現「メキシコ国家芸術・文学賞」)も獲得した、さすがに日本の読者をも納得させる逸品である。

(かたくら・じゅうぞう 天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会)

【書評 3】

Moyano López, Juan Carlos; Hiroyasu, Yoshimi; Yamaura, Ángela (2025).

La enseñanza del español en las universidades japonesas (日本の大学におけるスペイン語教育) .

Observatorio Global del Español, Instituto Cervantes, 149 頁 .

中島 さやか

本書は、Juan Carlos Moyano López、Yoshimi Hiroyasu、Ángela Yamaura の 3 名の研究者が、インスティトゥト・セルバンテス東京の協力のもと、2021 年から 2022 年にかけて日本の大学におけるスペイン語教育の現状を知るために実施した大規模な調査の結果をまとめた報告書である。

日本全国の大学に勤務するスペイン語教員に直接確認して得られたデータ、各大学のシラバス等から収集した資料、そして『Censo de profesores de Español como Lengua Extranjera (ELE) y de Estudios Hispánicos en Japón (Censo 2021)』と題してオンラインで実施された教員を対象とするアンケートの結果という、3 種類のデータを集計・分析し、学生、教員、大学に関する多角的な側面を総合的に明らかにしている。

研究者らは、日本の大学におけるスペイン語教育についての公的な統計調査が存在しない中、関係者から直接得られた情報を一つ一つ照会して教員や学生の総数を算出しており、信頼性の高い統計データを提示している。また、アンケートにはオンラインの自由参加であったにも関わらず日本の大学でスペイン語科目を担当する教員総数 845 名の約 36.9% にあたる 312 名が参加している。この意味において、本書は日本におけるスペイン語教育研究の基礎資料として極めて高い価値を有すると言える。

報告は、専門教育としてのスペイン語教育か、あるいは教養教育（第二外国語あるいは初習外国語）か、といった制度的位置づけに関する解説およびその統計資料、スペイン語科目を設置している大学の地域分布など多岐にわたるが、特に教員に関しては、国籍・出身国、性別（ジェンダー）、学歴、教育歴、教授言語、雇用形態に至るまで、教育・研究・勤務実態に関する多面的な情報を収集し、分析している。

スペイン語科目の設置状況については 1985 年の文部省（当時の名称）のデータとも対比されており、スペイン語科目は 20 世紀を通じて増加傾向にあったものの、2003 年をピークに減少へと転じている実態を明らかにしている。また、日本の 18 歳人口の持続的な減少と、それに関連する大学の組織・カリキュラム再編により、一部の大学でスペイン語専攻（専門学科・専攻コース）の募集停止や他学科への統合が進んだこと、そして大学全体のスペイン語開講数が緩やかに減少している現状についても言及されている。

また、本報告はスペイン語で執筆され、インスティトゥト・セルバンテスから出版されていることから推察されるように、将来日本でスペイン語教員を目指す者や、日本のスペイン語教育を多角的かつ総括的に理解したい国外の読者を強く意識した内容・構成となっている。例えば本報告は、20 世紀から 21 世紀に至る日本の大学におけるスペイン語教育の

発展史を俯瞰できる内容を含んでいる。そして現状のデータを提示するにあたって、日本の大学におけるスペイン語教育が、実用的な用途よりも一般教養としての性質を色濃く持ち、かつ独・仏・中・韓など他の外国語との競合関係にある相対的な存在であることも説明している。これにより、移民を対象としたスペイン語教育や、労働市場での実用的価値（道具的価値）を教育の主目的とする環境とは異なる、日本の大学ならではの外国語教育の文脈を、外部の読者が理解できるようになっている。

報告の結論部分では、スペイン語教育の改善に向けた数々の提言がなされている。具体的には、大学入学共通テストにおいて、英語に加える形で第二外国語としてスペイン語を導入すること、教員の待遇改善、公的機関同士の連携強化などが挙げられる。中でも特筆すべきは、多くの教員が専門的な指導訓練を受けないまま自身の学習経験（伝統的アプローチ）に依拠して授業を行っている実態を、データを用いて明らかにし、初任者研修や継続的な教員研修を充実させるべきだとする指摘は大きな意義を持つ。折しも日本国内においては、日本語教師の国家資格化やインスティトゥト・セルバンテス東京による講師養成コースの拡充にみられるように、外国語教育における専門的知識の必要性に対する公的認識が高まりを見せている。こうした今日の文脈に鑑みても、この指摘は説得力を有していると言える。

もっとも、個別項目の調査や分析においては幾分疑問の残る箇所もある。たとえば教授言語に関する項目で、各選択肢の数値結果（回答数）が明示されず割合（パーセンテージ）の提示にとどまっている点や、授業での使用教材を市販の教科書と自作教材を二項対立的に捉える見方は実際の教育現場の教材使用の実態をどこまで反映できているかという点などである。また、コロナ禍以降はオンライン授業（オンデマンド型やライブ配信型）を継続的に実施している大学もあることから、そうした面への言及があればより充実した内容になったと言える。

しかしながら、本調査が多岐にわたる側面から日本の大学のスペイン語教育の実態を明確に捉えていることは確かであり、大学間や高大連携など関連機関との連携強化、教員の雇用環境の改善、スペイン語教育に関する養成制度の拡充など、多様な問題意識を持つ教員が将来的な教育戦略を構築するうえで、本書が貴重な指針を与えることに変わりはない。日本におけるスペイン語教育の現在と未来に関心を持つ研究者、教育実践者、大学関係者にとって、必読の一冊であると言える。

（なかじま・さやか 明治学院大学准教授）

【著書・編著書紹介 1】

『スペイン語の認知言語学 ―多面的かつ普遍的な認知言語学を目指して―』

開拓社、2026 年

田林 洋一

私はスペイン語の否定現象、特に en を伴う前置詞句が主題化されることで否定極性を命題に与える「EN 否定」と呼ばれる現象を中心に考察する研究で学位を取得しましたが、それと一部連続したいくつかの論文をひとつにまとめたのが本書、『スペイン語の認知言語学 ―多面的かつ普遍的な認知言語学を目指して―』です。

タイトルが示す通り、拙著の目的は 2 つあります。ひとつは、スペイン語の現象をできるだけ認知言語学の枠組み一本で説明・勝負するということです。様々な研究で、スペイン語の諸現象を認知言語学的に説明する論稿はいくつもあったと思いますが、それでも 1 人の著者が、1 冊の本全体にわたって認知言語学的に考察した本は本邦ではなかなかないのではないかと考えています。

もうひとつは副題にもあるように、認知言語学には多面的な要素と普遍的な要素があることを示すことです。ある言語理論は、その説明理論がスマートでブラッシュアップされており、かつ説明原理や概念装置が少なければ少ないほど「優秀」です。しかし、スペイン語の（文法）現象は、そんな我々の儚い試みを嘲笑うかのように多様な側面を見せつけます。その「多様な言語現象」を「少数の理論的枠組みに無理やり押し込める」ことを避けて多くの概念装置を設定し（多面的な認知言語学）、それでもその中で普遍的な法則（普遍的な認知言語学）を見つけられたら、との思いで本書を執筆いたしました。以下、簡単に内容を列挙します。

第 1 章はスペイン語の話ではなく、言語学全般の説明です。言語学のみならず学問の姿勢は振り子のように「多様性・多面的」と「普遍性・一面的」を行き来しており、生成文法はその中でも「一面的、統一的」な様相を呈します。認知言語学は生成文法のアンチテーゼとして発展した過去を持つのでどちらかと言うと「多面的」ですが、認知言語学内部の理論でも「多様性」と「普遍性」が存在することを見ます。第 2 章から第 5 章までは、スペイン語の移動表現、他動性、se le V 構文、se の態といった現象を色々な認知言語学的概念を動員して説明します。第 6 章は、時として理論的な説明ばかりに走りやすい認知言語学を、第二言語習得の場に応用しました。ごく簡単な操作ですが、それでも認知言語学の諸理論が机上の空論ではなく、実地に活用できることを示したつもりです。

後半の第 7 章から第 10 章までは、主にスペイン語の前置詞 en に焦点を当てながら「百科事典的知識」「ネットワーク」「用法基盤」といった限られた概念を用いて説明していますが、無数の説明理論を導入したり、新たな原理原則・概念装置を設定することはできるだけ避けました。既存の認知言語学理論で、どこまでスペイン語の現象が説明できるのか、それを知りたかったからです。

本書は主に私が過去に書き溜めた論稿を1冊にまとめたため、各章の連続性はあまりありません。ですが、その中でも「前半ではスペイン語の多様な現象を多様な理論で説明する」、「後半ではその多様な現象をできるだけ少ない概念装置で説明する」ということを目標にしています。この言葉にすると簡単な、しかし実際に行ってみると甚だ困難な学術的作業がどの程度達せられたのかは読者諸賢のご判断にお任せするしかありませんが、かなり前に書いたものもあり、恐らく突っ込みどころが満載かもしれません。それでも、「スペイン語を認知言語学的に説明した書」の先達を担うことができれば、著者としてはこれに勝る喜びはありません。これを機に、叱咤激励、ご指導ご鞭撻を頂けましたら幸いです。

(たばやし・よういち 東北大学准教授)

【著書・編著書紹介 2】

京都セルバンテス懇話会編 編集委員 片倉充造 佐竹謙一

『ドン・キホーテとともに』 (行路社、2025)

編集委員

これまでセルバンテス / 『ドン・キホーテ』 の記念図書としては、〈セルバンテス生誕450周年〉①坂東・蔵本編『セルバンテスの世界』(世界思想社 1997)、②川成・坂東他編『ドン・キホーテ讃歌』(行路社 1997)、〈『ドン・キホーテ』[前篇] 公刊400年記念〉③京都外国語大学イスパニア語学科編『ドン・キホーテを読む』(行路社、2005)、④樋口・本田・坂東・山崎・片倉編『ドン・キホーテ事典』(行路社、同)、〈『ドン・キホーテ』[後篇] 公刊400年記念〉⑤坂東・山崎・片倉編『ドン・キホーテの世界』(論創社、2015)を挙げることができる。①は、アバリエ＝アルセやアルベルト・サンチェス、E・C・ライリー、エミリオ・カリーリヤ各氏など、海外セルバンティスタの寄稿を含む3部12章全252頁で構成される。②は、清水義範氏(小説家)のパロディ論、スペイン闘牛でも著書を持つ佐伯泰英氏(作家)の書き下ろしを始め、3部30編全262頁で構成される。③は、識者5名のシンポジウムならびにジャン・カナヴァジオ、イグナシオ・アレジャーノ両氏などセルバンティスタ10編の論稿全263頁で構成される。⑤は、“和製ラ・マンチャの男”松本幸四郎氏(九代)、芥川賞作家・室井光広氏を始め、[後篇]を基軸に編成された3部21編全295頁の論稿で構成される。

こうした先行書籍と同じく、本書は3部22編の論稿が掲載された全252頁(A5サイズ)、言わば、アンソロジー様式で〈セルバンテス『ドン・キホーテ』公刊420周年〉を祝賀する記念出版(2025)である。スペインの言語文化・社会文化・周辺領域の研究者がセルバンテス / 『ドン・キホーテ』を寿ぐべく寄稿している。既刊書の構成を踏まえ、2024年秋

季から『ドン・キホーテ』・セルバンテス・周辺領域という3区分で広く原稿依頼をしたところ、多くの反応があった。その際、編集委員および出版社側からは目次作成の参考までに、論稿の構成を把握する上で執筆者各位に概要を確認しながら作業を進めた。400字×25枚～30枚相当という字数制限に窮屈な思いをされた執筆者もいただろう、都合22本の原稿を収載できた。その構成は次の通りである。

I セルバンテスの時代とその周辺 6編（副題は省略）

青砥清一 ドン・キホーテと法について / 関 哲行 『ドン・キホーテ』後篇にみるモリスコ追放 / 三倉康博 セルバンテスと三人のカーディー / 吉田彩子 セルバンテスとペドロ・デ・バレンシア / 本田誠二 A. カストロ思想におけるセルバンテス / 佐竹謙一 セルバンテスの時代に生きる女性たち

II 名著『ドン・キホーテ』とその周辺 6編

片倉充造 邦訳『ドン・キホーテ』名場面断章 / 鈴木正士 伏線を張るセルバンテス / 田林洋一 ^{フィクション} 虚構の中に生きる異端児ドン・キホーテと異端的書物『ドン・キホーテ』 / 岡本信照 『ドン・キホーテ』と『ペルシ — レス』にみる季節名称をめぐって / 前田明美 アソリン著『ドン・キホーテの通った道』 / 岩根罔和 『ドン・キホーテ』風車と帆船

III 比較文化的アプローチ 9編

小阪知弘 三島由紀夫と『ドン・キホーテ』 / 徳永麻子 『ラ・レヘンタ』と『ドン・キホーテ』 / 橋本和美 絵本版『ドン・キホーテ』を用いた語学学習の可能性 / 菅田百合絵 日本人の求める「ドン・キホーテ」像 / 森 直香 現代マンガに描かれる『ドン・キホーテ』 / 安田圭史 現代スペインにおける「セルバンテス」と「ドン・キホーテ」 / ロペス・パソス、フアン・ホセ『ドン・キホーテ』における東洋 / 岡本淳子 『ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』に魅了された読者の大冒険 / 田尻陽一 戯曲は音への翻訳

あとがき 編集委員

『ドン・キホーテ』関係文献年表（2016～2025）1編 三浦知佐子

執筆者紹介

上記の各執筆者の論稿からは以下のことが概観できる。

- I: セルバンテスの時代を考証する論稿。スペイン同時代史で、モリスコ、カーディーなどイスラム文化の痕跡、影響の大きさを再認識する。セルバンテス時代の歴史性を分析する章。
- II: 文学（作品）論を始め、言語文化に主軸をおいた論稿。作品批評・評釈・解釈を進めるとともに、同時代の用語、社会状況、98年世代アソリンへの影響等も検討する章。
- III: 比較文学（三島、クラリン）、絵本・マンガ作品、政治史、東洋思想、TV番組、演劇公演等様々な観点から、『ドン・キホーテ』へ新たな接近を試みる章。

あとがき：『ドン・キホーテ』邦訳史や関係書籍出版の軌跡を考察。

関係文献年表：辻井正衛編『イスパニア文学・哲学文献年表』（天理大学学術研究会 1971・74）や、坂東省次『スペイン関係文献目録』（行路社 2005）、三倉康博「セルバンテス主要文献案内」（野谷編著『セルバンテス』集英社文庫収載 2016）の系譜に連なる 2016～25 年の資料集。

本書では、北は東北大学（宮城）から南は琉球大学（沖縄）まで、18 大学 22 名の研究者が意欲的な記念論稿を寄せている。いずれも大学（スペイン語）教員・研究者による執筆陣である。

AI が加速度的な進化を遂げ、新たに時代が求める原書翻訳や関連文献のさらなる登場が予測されるなか、これからもスペインの至宝セルバンテス／『ドン・キホーテ』に特化したアンソロジーが確実に刊行され、広く読者層を拡大し、スペイン語圏文化への理解が深化することが望まれる。

（かたくら・じゅうぞう 天理大学名誉教授、さたけ・けんいち 南山大学名誉教授）

【学会等報告 1】

京都セルバンテス懇話会第 26 回全国・静岡大会

三浦 知佐子

2025 年 9 月 5 日 (金) に駐日スペイン大使館、静岡県立大学、朝日出版社、行路社後援、京都セルバンテス懇話会 (代表・片倉充造天理大学名誉教授) 主催、第 26 回全国・静岡大会が、静岡県立大学の共催 (実行委員・森直香教授) で挙行された。

今回の全国大会は 3 部構成で、I ガリシア関連の聖母マリア頌歌集を主題とした 2 点の研究発表、II 『ドン・キホーテ』 (前篇 1605 年／後篇 1615 年) の前篇刊行 420 周年を記念して企画された「特集セルバンテス『ドン・キホーテ』記念年モノグラフィア 2025」にて 7 点の発表、そして III 特別講演が行われた。以下にプログラムを紹介する。

I. 研究発表

発表 1：浅野ひとみ (名古屋大学人文学研究科共同研究員)

「『聖母マリア頌歌集』挿絵に表されたキリスト教信仰具」

発表 2：浅香武和 (Real Academia Galega)

「『マリア頌歌集』にみる中世の食卓について

—A mesa medieval nas Cantigas mariaais—」

II. 〈特集セルバンテス『ドン・キホーテ』記念年モノグラフィア 2025〉

Mesa1

発表 1：ファン・ロペス (天理大学准教授)

「東洋哲学から読み解くスペイン文学 —『ドン・キホーテ』のアンチコスモス—」

発表 2：安田圭史 (龍谷大学教授)

「現代スペインにおける「セルバンテス」と『ドン・キホーテ』 —「象徴」と「和解」の狭間で—」

Mesa2

発表 3：徳永麻子 (日本大学聖心女子大学兼任講師)

「『ラ・レヘンタ』と『ドン・キホーテ』」

発表 4：田林洋一 (東北大学准教授)

「虚構の中に生きる異端児ドン・キホーテ — 様々な物語を生み出す狂気の手紙『ドン・キホーテ』と狂人ドン・キホーテ」

Mesa3

発表 5：橋本和美 (天理大学准教授)

「絵本版『ドン・キホーテ』を用いた語学学習の可能性 — 名詞と動詞の分析を手がかりに —」

発表6：菅田百合絵（愛知学院大学専任講師）

「『ドン・キホーテのような人』とはどのような人物か」

発表7：前田明美（中京大学特任准教授）

「アソリン著『ドン・キホーテの通った道』」

III. 特別講演：神宮寺啓（劇団クセック ACT 代表）

《越境する演劇を目指して — 劇団クセック ACT 公演『ドン・キホーテ』》

聞き手 森 直香（静岡県立大学）

今回の第26回全国大会は、台風15号の影響で新幹線が数時間運転見合わせとなり、発表順序の変更等、その他のトラブルもあったが、多くの方々に参加いただいた。本大会については、京都セルバンテス懇話会編『スペイン学』第28号（論創社、2026年4月）にも関連の記事が掲載されている。IIの〈特集モノグラフィア〉については、記念書籍、京都セルバンテス懇話会編『ドン・キホーテとともに』（行路社、2025）を参照されたい。

2026年11月28日（土）には、第27回全国・奈良大会が天理大学で開催される。

（みうら・ちさこ 京都セルバンテス懇話会庶務・天理大学他兼任講師）

【学会等報告2】

東京スペイン語学研究会 (CELHT) 2025 年度活動報告

喜多田 敏嵩

東京を中心に活動するスペイン語学研究者で構成される「東京スペイン語学研究会 (Círculo de Estudios Lingüísticos Hispánicos de Tokio: CELHT)」の2025年度の活動について報告する。昨年度は東京外国語大学を対面会場とするハイフレックス形式の定例研究会が11回開催され、以下に記す11点の研究発表が行われた。発表者の氏名・所属は発表時点のものである。

第549回例会 (2025/05/10)

題目：存在動詞と出現動詞を含む文の語順における相違点

— 主語の属性と提示文の観点から —

発表者：結城健太郎（東海大学 教授）

第550回例会 (2025/05/31)

題目：原因節の位置と節の長さ：Gries (2020, 21) に基づく探索的研究

発表者：堀江舞柚 (東京外国語大学大学院 博士後期課程)

第 551 回例会 (2025/06/21)

題目：言語研究における生成 AI の活用 — スペイン語研究を例として —

発表者：結城健太郎 (東海大学 教授)

第 552 回例会 (2025/08/02)

題目：スペイン黄金世紀の正書法文献における用語法

発表者：高田丈太郎 (サラマンカ大学大学院 博士後期課程)

第 553 回例会 (2025/09/27)

題目：スペイン語繫辞動詞文における属詞再考：個体レベル述語、ステージレベル述語の
意味的特を探る

発表者：大森洋子 (明治学院大学 名誉教授)

第 554 回例会 (2025/10/25)

題目：使用語彙と社会言語学的要因の関係：PRESEEA-Santander コーパスの全体的観察

発表者：上田博人 (東京大学 名誉教授)

第 555 回例会 (2025/11/29)

題目：エコークエスチョンと〈エコークエスチョン＋後続文〉のパターンにおけるエコーク
エスチョンの比較

発表者：工藤綾 (神奈川大学ほか 非常勤講師)

第 556 回例会 (2025/12/20)

題目：黄金世紀以降のスペイン語における接続法過去 ra 形の成立と普及
— 副詞節の事例を中心に —

発表者：高梨泰誠 (神奈川大学大学院 博士前期課程)

第 557 回例会 (2026/01/31)

題目：El lenguaje de la emoción en manuales de ELE utilizados en Japón: un análisis preliminar

発表者：山浦アンヘラ (中央大学 准教授)

第 558 回例会 (2026/03/07)

題目：「haber de + 不定詞」についての通時的考察

発表者：鈴木恵美子 (成蹊大学 教授)

第 559 回例会 (2026/03/28)

題目：日本語母語話者のスペイン語冠詞使用：英語母語話者およびスペイン語母語話者と
の対照

発表者：小橋さおり (順天堂大学 助教)

また、8月の定例研究会に代わって、関西スペイン語学研究会 (Círculo de Lingüística
Hispanica de Kansai: CLHK) と合同でスペイン語学セミナー (Seminario de Lingüística Española

de Japón : SELE) が例年通り開催された。琵琶湖畔のセミナーハウスに 35 名を超えるスペイン語学研究者が全国から集い、9 月 4 日から 9 月 6 日の 3 日間にわたって世代や所属を横断した議論が活発に行われた。

(きただ・としたか 東京外国語大学講師)

【学会等報告 3】

関西スペイン語学研究会 (CLHK) 2025 年度活動報告

岡 あゆみ

関西スペイン語学研究会 (Círculo de Lingüística Hispánica de Kansai、略称 CLHK) の 2025 年度の活動を以下のとおり報告いたします。定例研究会は 11 回開催し、13 本の研究発表が行われました。

第 471 回 2025 年 4 月 26 日 立命館大学大阪いばらきキャンパス (オンライン併用)

有田節子 (立命館大学) 「スペイン語母語話者は「条件」をどう使用するか — I-JASFOLAS を手がかりに —」

第 472 回 2025 年 5 月 18 日 オンライン

森本匡紀 (大阪大学大学院) 「スペイン語の接続法の意味論的価値に関する諸考察 — 存在論ならびに認識論の観点から見た接続法の機能 —」

第 473 回 2025 年 6 月 21 日 オンライン

福嶋教隆 「書評 : Juan Romero Díaz. 2023. *Categorías léxicas en español y japonés*. Madrid: UAM Ediciones.」

第 474 回 2025 年 7 月 19 日 オンライン

本橋祈 (東京外国語大学ほか) 「動詞の不定詞を主語とする動詞 ser の点過去文と線過去文の観察」「生成 AI を対象に行った質問紙調査の報告 (“El libro fue/era interesante” について)」

第 475 回 2025 年 8 月 2 日 オンライン

安達直樹 (神戸市外国語大学) 「ネブリハの正書法と活字の書字法 — 文字 v /u の規則案の再考」

第 476 回 2025 年 9 月 27 日 オンライン

高垣敏博 「¿Me es {útil /interesante}... o es {útil /interesante} para mí...?: 形容詞補語の間接補語化 (与格化) について」

第 477 回 2025 年 11 月 1 日 オンライン

蔵満啓太 (大阪大学大学院) 「カタルーニャ語東部方言における弱勢音節内の母音実現について —castellanisme に関するインフォーマント調査からみえるコード混在の特性—」

第 478 回 2025 年 12 月 20 日 西宮市立中央公民館

柿原武史 (京都大学) 「ガリシア語の直接目的語と前置詞 a についての一考察：規範と実際の使用と教育文法の間をいかに埋めるか？」

川口正通 (大阪大学) 「スペイン語中級文法教科書の作成に向けて」

第 479 回 2026 年 1 月 24 日 オンライン

金荷銀 (大阪大学大学院) 「和らげ表現としての pues について」

第 480 回 2026 年 2 月 14 日 オンライン

塚原信行 (京都大学) 「イマージョン・プログラム再考」

第 481 回 2026 年 3 月 29 日 関西学院大学梅田キャンパス

長縄祐弥 (拓殖大学) 「動詞 lanzar の意味分析」

土屋亮 (亜細亜大学) 「Hoy es (el) 29 de marzo」

また、2025 年 9 月には東京スペイン語学研究会と合同でスペイン語学セミナー SELE 2025 を開催し、統一テーマ「規範の揺れ (変化)」に関する発表が 7 本、自由テーマによる発表が 4 本行われました。

さらに、2026 年 8 月下旬には当研究会の機関誌 *Lingüística Hispánica* Vol.48 (2025) が刊行され、山田善郎先生百歳を寿ぐ記事 1 本、論文 6 本、書評 1 本のほか、前述の SELE 2025 の発表要旨も掲載されております。

(おか・あゆみ 関西外国語大学 講師 (特任))

【学会等報告 4】

Grupo de Investigación de la Didáctica del Español (GIDE)

Informe de las actividades (2025-2026)

Carmen Belén García Bernal

Les presentamos el informe de las actividades realizadas por el Grupo de Investigación de la Didáctica del Español (GIDE) durante el periodo de abril de 2025 a marzo de 2026. GIDE está formado por profesores de español en universidades u otras instituciones en el área de Tokio y realiza su labor académica desde 2003. Su objetivo es promover el estudio y la investigación sobre materiales didácticos, propuestas metodológicas y métodos de

evaluación. Asimismo, ofrece a los profesores la oportunidad de un desarrollo profesional continuo como parte de las competencias clave del profesorado (Instituto Cervantes [IC], 2012).

Desde abril de 2023, GIDE ha orientado su trabajo hacia la mediación. En una primera fase, la investigación se centró en comprender el marco teórico: su definición y cómo la mediación tiende a ocurrir en las actividades que aparecen en el *Volumen Complementario del Marco Común Europeo de Referencia para las Lenguas (MCER VC)* (Consejo de Europa, 2020). Para ello se hicieron presentaciones sobre las actividades y las estrategias de mediación.

En abril de 2025, una vez concluida esta primera parte se acordó que el siguiente paso sería llevar la teoría a la práctica. Se propuso usar el *Modelo de Actuación. Aplicaciones prácticas para la clase de español* (GIDE, 2019) como manual de referencia y se dividieron los equipos de trabajo según los temas del *Modelo de Actuación*. El plan de acción consistía en buscar cómo aparecía reflejada la mediación en los temas correspondientes. En el caso de que no apareciera, se podía adaptar el contenido añadiendo alguna actividad en la secuencia didáctica o bien, crearla desde cero, respetando los contenidos socioculturales, funcionales, gramaticales y léxicos del tema. Nuestro objetivo era registrar en qué forma aparecía la mediación y qué estrategias se utilizaban. Para que el proceso de documentación se realizara de manera clara y homogénea, se creó una plantilla común para que los grupos fueran reflejando su trabajo. Las presentaciones se desarrollaron entre octubre de 2025 y febrero de 2026. Las discusiones derivadas del análisis de las actividades tratadas nos sirvieron para ir profundizando en el tema, intercambiar diferentes perspectivas entre los miembros y mejorar la comprensión sobre la mediación.

En noviembre de 2025 se llevó a cabo el taller que anualmente ofrece GIDE. Víctor Barraso, profesor titular de la Universidad Ritsumeikan Asia Pacific, nos habló sobre “La clase plurilingüe de ELE en Japón: perfil lingüístico, actitud de los aprendices hacia el uso de otras lenguas y estrategias en el aula”. La presentación puso de relieve el valor de las prácticas plurilingües en la enseñanza de ELE en universidades japonesas. Mostró que el uso de varias lenguas favorece el aprendizaje del español y el desarrollo de la competencia plurilingüe, al tiempo que destacó el papel del profesorado en la promoción de una educación lingüística inclusiva.

Para más información sobre el grupo, sus actividades y publicaciones, puede consultarse la página web oficial: <https://gide2025.sakura.ne.jp/index.html>

Referencias bibliográficas

Consejo de Europa. (2020). *Marco común europeo de referencia para las lenguas: aprendizaje, enseñanza, evaluación. Volumen complementario*. Servicio de Publicaciones del Consejo de Europa; Ministerio de Educación y Formación Profesional; Instituto Cervantes. Centro Virtual Cervantes

GIDE. (2019). *Modelo de actuación. Aplicaciones prácticas para la clase de español*. GIDE.

Instituto Cervantes. (2012). *Competencias clave del profesorado de lenguas segundas y extranjeras*. Dirección Académica, Instituto Cervantes. Centro Virtual Cervantes

(カルメン・ベレン・ガルシア・ベルナル 早稲田大学非常勤講師)

【学会等報告 5】

関西スペイン語教授法ワークショップ (TADESKA) 2025 年度活動報告

小川 雅美・柳田 玲奈

「関西スペイン語教授法ワークショップ (Taller de Didáctica de Español de Kansai、略称 TADESKA)」は、スペイン語教師同士が、専門分野・教歴等の差異を超えたフラットで多角的な視座から、スペイン語教育についての情報を共有したり考えを話し合ったりする勉強会です。

2025 年度は、テーマ 1 「歌を通して学習者をスペイン語圏の社会文化へ誘おう」、テーマ 2 「授業中のどんよりムードをリフレッシュ！ — 学生たちの意識を活性化する短いコミュニケーション・アクティビティ —」の 2 つを中心に、口頭発表やワークショップを行いました。これらの活動の概要を以下の通り報告致します。

第 179 回 2025 年 4 月 27 日 (オンライン開催)

小川雅美 (自由テーマ) 「実践共同体としての TADESKA についての一考察」

第 180 回 6 月 8 日 (於立命館大学大阪いばらきキャンパス)

川口正通 (テーマ 2) 「気分転換のためのスペイン語授業内アクティビティの提案」

岡村ビクトル勇 (テーマ 2) 「辞書の逆襲 — 辞書を使用した協力、対戦ゲームの紹介 —」

第 181 回 7 月 13 日 (於立命館大学大阪いばらきキャンパス)

江澤照美 (テーマ 2) 「大阪万博について情報共有しよう！」

岡見友里江 (自由テーマ) 「語学教育における合理的配慮 — 実践と課題 —」

第 182 回 8 月 28 日 (於茨木市文化・子育て複合施設「おにクル」)

宮本愛梨 (テーマ 2) 「五感を使って身につける — 学生のモチベーションを高めるア

クティビティ提案 —」

Mónica Pérez(テーマ1)「『ピチ』の昔と今 — マドリードの音楽と時代の移り変わり —」

第183回 10月12日(於関西学院大学梅田キャンパス)

禪野美帆(テーマ1)「スペイン語授業において歌を効果的に使うには」

Roberto Negrón(テーマ1)「ヒバロからトラップまで — プエルトリコのアイデンティティを物語る歌の数々 —」

第184回 11月9日(オンライン開催)

平井素子・Ainhua Bujanda(テーマ1)「歌を通して学習者をスペイン語圏の社会文化へ誘おう — Celia Cruz “Yo viviré” を題材として —」

平井素子・Ainhua Bujanda(自由テーマ)「スペイン語作文添削における ChatGPT の活用可能性 — 日本の B1 学習者を対象とした事例研究 —」

第185回 12月14日(於関西学院大学梅田キャンパス)

長由佳(テーマ2)「生成 AI を活用した授業用ミニゲーム作成の可能性」

月野楓子(テーマ1)「沖縄の中のラテン／アメリカの中のラテン — 音楽を用いた授業のバリエーションを考える —」

第186回 2026年2月15日(於立命館大学大阪いばらきキャンパス)

『第17回関西スペイン語教師の集い』 テーマ：年間テーマと同じ

【午前の部】スピーチとギター演奏(テーマ1):安保寛尚「音楽を利用したスペイン・ラテンアメリカ世界への誘い」

【午後の部】ワークショップ(テーマ2):小川雅美・柳田玲奈・各務恭子「10分でできるリフレッシュ・アクティビティを作ろう」

第187回 3月11日(於西宮市中央公民館)

柳田玲奈(テーマ2)「授業中の集中力を取り戻すシンプル・アクティビティを考えよう！」

テーマ1では、歌を通してスペイン、カリブ、南米そして日本の文化社会の真髄の一端に触れ、テーマ2では、担当者や参加者の独創性溢れるミニ・アクティビティを紹介しあうことで、スペイン語教育の豊かな可能性を楽しく追求しました。2026年度は、「(生成)AI時代のスペイン語教育」を年間テーマとして例会を実施しております。

今年はTADESKAが発足して20年目となります。地味ながらも長きに渡って活動を継続することができたのは、TADESKAのメンバーのみならず、多くのスペイン語教師の方々のご理解と温かなご支援のおかげです。この場を借りてみなさまに感謝の気持ちを捧げます。2006年の第1回以来の足跡は、TADESKA ホームページ (<https://tadeska.sakura.ne.jp/>) の議事録にて公開しております。

(おがわ・まさみ 京都大学等非常勤講師、やなぎだ・れいな 関西外国語大学准教授)

【学会等報告 6】

東京スペイン語文学研究会 2025 年度研究報告

大楠 栄三

「東京スペイン語文学研究会」(AHLTO) は、2026 年 9 月の次の研究会で 220 回を数えることになる。

73 歳のベニート・ペレス＝ガルドスは、雑誌の依頼で、唯一の自伝『記憶をなくした男の回想録』(Memorias de un desmemoriado) を 1916 年に連載するが、ほぼ視力を失っていたせいだろうか、とくに出来事が起きた年に関して記憶があやふやだ。ガルドスに例えるのもおこがましいが、最近視力の低下が著しいわたしも、それとともに記憶力まで低下してしまった。本研究会の第 1 回に、自分が出席したのは覚えているのだが、正確な日付けどころか季節も思い出せない。ただ、1993 年度中だったのは確か。東京外国語大学に博士後期課程が新設されて 2 年目、指導する学生が増えたため、僕らに研究発表の場を与えるため、むしろ僕らにとっては年に数回の発表を強制される場として、故牛島信明先生が創設された会だったから。1 回目の参加者は、当時の西ヶ原キャンパスの個人研究室に入りうる程度。本学会に所属した物故者だけ名を挙げるなら、牛島信明先生、竹村文彦先生、福井千春先生、それに、ここから記憶が曖昧で、留学中だったかもしれないが当時在籍中だった Y 氏と F 氏、そして末席に僕が座っていた。ぼんやりとした記憶だが、1 回目か 2 回目の研究会で、修士論文(クラリン)について発表した際、竹村先生から強烈的な質問を受け、自分がたじろいだのは明確に覚えている。こんな糸が張りつめたような雰囲気の研究会在毎月開催されたのだから、大学院生はたまったものではない。ときに某出版社の現役編集者も参加くださり、より緊張が高まった。ただ、研究会後、毎回皆で大塚駅前の居酒屋(2 階の傾いた畳の間)にくりだし、羽目を外して騒いだ記憶はなぜか鮮明だ。

初回からすでに 30 年以上を経たこの研究会、2026 年度はわたしの本務校で開催させてもらっている。ちなみに昨年、2025 年度は駒井睦子氏の尽力のもと、清泉女子大学で開催され、以下に記す 7 点の研究発表がおこなわれた。

第 214 回 2025 年 7 月 19 日(土)

保崎典子「ムンサラット・ロッチの『日常オペラ』(1982)における xarnego の存在をめぐって」

大楠栄三「ペレス＝ガルドス *La desheredada* におけるマドリードの街路の描写について」

第 215 回 2025 年 9 月 20 日(土)

枝川沙緋麗「ベッケルの「月光の一筋」における絵画的表現と〈想像力〉」

第 216 回 2025 年 11 月 15 日(土)

花方寿行「PM 事件再考——美学的争点をめぐって」

光畑太平「チャーリー・ガルシア新作『サソリの論理』の歌詞を読む」

第 217 回 2026 年 3 月 21 日 (土)

金子奈美「ベルナルド・アチャガ『オババコアック』における待遇表現の自己翻訳」

駒井睦子「近代ラテンアメリカの女性詩人たち：ファナ・デ・イバルブル」

(おおぐす・えいぞう 明治大学教授)

【学会等報告 7】

Confederación Académica Nipona, Española y Latinoamericana (CANELA):
informe de actividades de 2025 a 2026

Carlos García Ruiz-Castillo

CANELA es una asociación académica japonesa que, desde su fundación en 1988, centra su interés en el hispanismo, los estudios japoneses y las relaciones entre ambos ámbitos. Cuenta actualmente con unos 240 miembros distribuidos en cuatro secciones (Historia y Pensamiento, Literatura, Metodología de la Enseñanza de las Lenguas de España e Hispanoamérica y Lingüística). Sus principales actividades son la celebración de un congreso internacional anual, la publicación de la revista académica *Cuadernos CANELA* y otras actividades que se realizan entre congresos. En este breve informe reseñamos las correspondientes al período 2025-2026.

El XXXVIII Congreso Internacional de CANELA se celebró en la Universidad de Hiroshima, en su campus principal de la ciudad de Higashihiroshima, del 15 al 17 de mayo de 2026. Supuso la culminación del primer año de trabajo de la Junta Directiva presidida por el profesor Juan Carlos Moyano. A la Universidad de Hiroshima acudió un elevado número de participantes para comunicar los resultados de sus investigaciones. De ellos, 47 están establecidos en Japón y 38 en el extranjero, en 12 países diferentes, lo cual confirma el carácter internacional de este congreso. Además, asistieron 51 oyentes. En total, se presentaron 71 ponencias y 3 pósters.

El congreso contó con tres conferencias plenarias. La conferencia inaugural estuvo a cargo de la profesora Reiko Tateiwa, de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto, quien trató la difusión de imágenes religiosas en el culto cristiano en los territorios incorporados al mundo hispánico. Con motivo de la sede del congreso, la profesora Silvia Lidia González, de la Universidad de Estudios Internacionales de Kanda, pronunció una conferencia sobre la memoria de los bombardeos atómicos de Hiroshima y Nagasaki. Exploró «el lenguaje de la sensibilidad» en expresiones artísticas y en la cultura popular como vía

para superar tanto el discurso de la victoria estadounidense como de la victimización de Japón. Finalmente, el profesor Pablo Valdivia, de la Universidad de Groningen, abordó la neuroquímica de la lectura y la influencia de las metáforas en los estados afectivos y la imaginación social.

El programa incluyó además dos presentaciones institucionales y un encuentro con la Asociación de Científicos Españoles en Japón (ACE Japón). El Instituto Cervantes de Tokio informó sobre la acreditación de centros de enseñanza de español como lengua extranjera. Por su parte, la Consejería de Educación de la Embajada de España para China, Corea del Sur y Japón presentó recursos digitales gratuitos, becas y programas de formación para el profesorado. En el encuentro con ACE Japón, fruto de una creciente colaboración entre ambas asociaciones, su presidente, el profesor José M. M. Caaveiro, y otros científicos presentaron sus investigaciones sobre inteligencia artificial, hongos parásitos marinos, transición energética y proteínas y salud. Este espíritu interdisciplinar dio lugar a una mesa redonda sobre el contexto académico japonés y las oportunidades que el asociacionismo ofrece a los investigadores.

Asimismo, en el congreso se organizó por primera vez un programa social. Se programó una visita guiada en español a bodegas locales productoras de sake. Además, gracias a la colaboración del Hiroshima Convention & Visitors Bureau, los asistentes pudieron acceder al Museo Conmemorativo de la Paz de Hiroshima y escuchar, con interpretación al español por estudiantes de la Universidad Prefectural de Aichi, el testimonio de víctimas del bombardeo atómico.

Con el último número de *Cuadernos CANELA* se ha publicado el volumen más extenso de la revista hasta el momento. Reúne los textos de las tres conferencias plenarias del congreso anterior, nueve artículos de investigación y tres reseñas. Además, se ha renovado el Comité Científico y se ha mejorado la indexación con la reciente inclusión en la base de datos EBSCOhost.

La principal actividad entre congresos durante el período 2025-2026 fue la participación de CANELA en el VI Encuentro de ACE Japón, celebrado en octubre en el Pabellón de España de la EXPO 2025 en Osaka.

Finalmente, cabe señalar que en este período se ha actualizado la página web de la asociación (www.canela.org.es). Se ha modernizado el diseño, se han mejorado varios procedimientos en línea y se ha recopilado nueva información sobre la historia de CANELA, en homenaje a sus fundadores y a las sucesivas Juntas Directivas.

En definitiva, las actividades desarrolladas por CANELA durante este período muestran que la asociación goza de una excelente salud como organización y de un notable

dinamismo. Manteniendo la visión que ha guiado su trayectoria, «Unión, Ciencia, Amistad», CANELA se encamina hacia un futuro prometedor como una asociación académica de prestigio y con proyección internacional en el ámbito del hispanismo y de los estudios japoneses.

(ガルシア・ルイス・カステイージョ・カルロス 広島大学准教授)

【その他】

「高等学校スペイン語教育ネットワーク」設立の報告

廣瀬 瞳

このたび、日本の高等学校のスペイン語教育に携わる関係者がつながり、中等教育機関におけるスペイン語教育の充実と発展を図ることを目的として、「高等学校スペイン語教育ネットワーク」が発足しました。設立にあたり、準備段階から活動の周知にご協力くださった皆様、ならびにさまざまな立場から助言やご支援をお寄せくださった関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。本稿では、本団体の設立の経緯と目的、これまでの活動について報告いたします。

日本の高等学校をはじめとする中等教育機関では、スペイン語を担当する教員が校内に一人しかおらず、授業運営に関する相談や情報交換ができる人が限られていることが少なくありません。また、高等学校のスペイン語教育の現場に特化した教材や指導指針は十分に整備されているとは言えず、各学校の教員が孤軍奮闘している現状があります。

一方、他の言語では、早いものでは40年以上前から高等学校の教員ネットワークが存在します。例えば、中国語では高等学校中国語教育研究会（高中研、1982年設立）、ドイツ語では高等学校ドイツ語教育研究会（高独研、1988年設立）、韓国・朝鮮語では高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク（JAKEHS、1999年設立）、フランス語では日仏高等学校ネットワーク（Colibri、2002年設立）が挙げられます。しかし、スペイン語には、中等教育機関に特化した団体は存在していませんでした。

こうした状況を背景として、2023年11月より、高等学校のスペイン語教育に携わる遠藤杏、各務恭子、高野正之、寺尾美登里、日比野規生、廣瀬瞳の6名が「高校スペイン語教師の会（仮）」として準備を開始し、正式な団体発足に向けて以下の活動を行いました。

2024年3月3日 口頭発表「高校スペイン語教師ネットワークの必要性」

高大シンポジウム「スペイン語教育における高大接続の現状と未来」（昭和女子大学）

2024年3月10日 口頭発表「『高校スペイン語教師の会』設立に向けて」

第12回JACTFL（一般社団法人日本外国語教育推進機構）シンポジウム（上智大学）

2024年3月24日 第1回高校スペイン語教師の交流会（オンライン）

2024年8月24日 第2回高校スペイン語教師の交流会（オンライン）

2025年3月22日 第3回高校スペイン語教師の交流会（神奈川県立深沢高等学校・奈良県立国際高等学校、オンライン併用）

2026年3月8日 「高等学校スペイン語教育ネットワーク」設立に向けた周知

第14回JACTFLシンポジウム 第4部「高校の各言語教員グループ紹介」（上智大学）

2026年3月22日 「高等学校スペイン語教育ネットワーク」設立

第1回高等学校スペイン語教育ネットワーク大会&交流会「初回の授業で生徒を引き

付ける工夫」(神奈川県立深沢高等学校・奈良県立国際高等学校、オンライン併用)

これらの活動を通して、高等学校のスペイン語教育に携わる関係者同士が交流し、情報を共有する機会を設けてきました。そして、約2年半の準備期間を経て、「高校スペイン語教師の会(仮)」を改組し、2026年3月22日に「高等学校スペイン語教育ネットワーク」として正式に設立しました。

今後の活動としては、高等学校でスペイン語を教える教員同士の交流を促進するとともに、高等学校の教員と大学教員、関連機関・団体等との交流・連携を図っていきます。また、将来的には、高等学校のスペイン語教員を対象とした研修機会の提供や、教員養成への協力などにも取り組んでいく予定です。

2026年7月現在、会員数は30名です。高等学校のスペイン語教員に限らず、中学校教員、大学教員、出版社の方など、高等学校のスペイン語教育に携わる方、関心を持つ方が、さまざまな立場から参加しています。

本稿をお読みくださった皆様にも、「高等学校スペイン語教育ネットワーク」の活動に関心をお寄せいただけたら幸いです。また、高等学校のスペイン語教育関係者や、関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひ本団体をご紹介ください。

《高等学校スペイン語教育ネットワーク》

ホームページ：<https://spanish-hs-teachers.github.io/network-japan/>

(ひろせ・ひとみ 慶應義塾大学専任講師)

【新刊案内】

2025 年 6 月から 2026 年 5 月までのスペイン・ラテンアメリカ関係の新刊書です。遺漏にお気づきの際は、ご教示願います。

- 『必然の帝国：新大陸における奴隷制、自由、欺瞞』、グレッグ・グランディン（著）、佐藤成男（訳）、三省堂書店 / 創英社、2025 年 6 月
- 『ドミニカ共和国を知るための 60 章』第 2 版、国本伊代（編）、白神博昭（編）、明石書店、2025 年 6 月
- 『目に見えない世界の旅：ペルーのシャーマンが語る聖なる植物の癒やし』、ハチュマク、デビッド・L・キャロル（著）、北村京子（訳）、作品社、2025 年 6 月
- 『パラグアイの初等教育課程におけるバイリンガル教育と国民アイデンティティの基盤形成』、牛田千鶴（著）、南山大学、2025 年 6 月
- 『かぴばら俳句会作品集：《ブラジル日系文学》子ども・日本語学習者による俳句コーナー』、ブラジル日本語センター / ブラジル日系文学、2025 年 6 月
- 『かぴばら俳句会作品集：《ブラジル日系文学》子ども・日本語学習者による俳句コーナー』、三輪遊（選句評・コラム）、ブラジル日本語センター / ブラジル日系文学、2025 年 6 月
- 『食文化からブラジルを知るための 55 章』、岸和田仁（編）、麻生雅人（編）、山本綾子（編）、明石書店、2025 年 6 月
- 『ポルトガルへ』、矢野有貴見（著）、イカロス出版、2025 年 6 月
- 『北方なき南』、ディオゴ・セイシャス・ロペス（著）、佐伯達也（訳）、FORGET BOOKS、2025 年 6 月
- 『1494 年：中世スペイン王家の内紛はいかにして世界を二分させたのか』、スティーブン・R・バウン（著）、小林政子（訳）、国書刊行会、2025 年 7 月
- 『ファン・デ・マイレーナ』、アントニオ・マチャード（著）、杉山武（訳）、法政大学出版局、2025 年 7 月
- 『世界終末戦争 上』、マリオ・バルガス＝リョサ（著）、旦敬介（訳）、岩波書店、2025 年 7 月
- 『1964 年ブラジル・クーデタと民主体制の崩壊』、橘生子（著）、花伝社、2025 年 7 月
- 『ブラジルの先住民族：歴史的・社会文化的な視点から』、ニウタ・ジアス（編）、上智大学イベロアメリカ研究所、2025 年 7 月
- 『修道院覚書』、ジョゼ・サラマーゴ（著）、木下眞穂（訳）、河出書房新社、2025 年 7 月
- 『100 このタネがとんでった』、イザベル・ミニョス・マルティンス（著）、河野ヤラ政枝（著）、木下眞穂（訳）、岩波書店、2025 年 7 月
- 『スペイン語検定 5 級・6 級単語集 [音声 DL 版]』、青砥清一（著）、白水社、2025 年 8 月
- 『スペイン文明論集〈1〉文学・言語篇』、アメリコ・カストロ（著）、本田誠二（訳）、水声社、2025 年 8 月

- 『スペイン文明論集〈2〉歴史・文化篇』、アメリコ・カストロ（著）、本田誠二（訳）、水声社、2025年8月
- 『スカートをはいたドン・キホーテ』、ベニート・ペレス＝ガルドス（著）、大楠栄三（訳）、幻戯書房、2025年8月
- 『はじめて神経をみたサンティアゴ・ラモン・イ・カハール』、クリスティン・アイヴァーソン（著）、ルチアーノ・ロサーノ（著）、坪子理美（訳）、化学同人、2025年8月
- 『パスカル・ヒメノ：四手連弾のための《スパーキー組曲》』、パスカル・ヒメノ（著）、株式会社全音楽譜出版社、2025年8月
- 『手作りトルティーヤから極めるタコス：メキシコ屋台の定番と家庭の味』、丸山久美（著）、グラフィック社、2025年8月
- 『食の国ペルーでの最高に贅沢な日々』、宮崎泰（著）、彩流社、2025年8月
- 『世界終末戦争下』、マリオ・バルガス＝リョサ（著）、旦敬介（訳）、岩波書店、2025年8月
- 『激動の時代』、マリオ・バルガス＝リョサ（著）、久野量一（訳）、作品社、2025年8月
- 『詳解チェ・ゲバラ ボリビア日記』、エルネスト・チェ・ゲバラ（著）、伊高浩昭（訳・解説）、中央公論新社、2025年8月
- 『使えるブラジルポルトガル語単語 2500 [音声 DL 付]』、田町崎（著）、ベレ出版、2025年8月
- 『佳子さまブラジル公式ご訪問記念 世界を魅了する微笑み』、主婦と生活社、2025年8月
- 『ブラジルリンゴの大谷と西宮芝の大谷：夢を追って移民船に乗り込んだ2人のオータニ：大谷忠敬の世界』、22世紀アート編集部（編著）、22世紀アート、2025年8月
- 『AJAPE 創立 25 周年記念誌 = 25 años de AJAPE』、日本ペルー共生協会神奈川（監修）、日本ペルー共生協会神奈川、2025年9月
- 『海の向こうに見た夢 = Un sueño más allá del mar : チリと日本を結ぶ、100 年の家族史』、笠戸丸プロジェクト（編）、ジャカランダ開発、2025年9月
- 『コーヒーと内戦 = Café y Conflicto Interno de El Salvador : エルサルバドル ヒル家三代の物語』、川島良彰、山下加夏（著）、平凡社、2025年9月
- 『海外諸国の電気事業：メキシコ合衆国・2025 年』、海外電力調査会（編集）、海外電力調査会、2025年9月
- 『日露戦争後に外国渡航する地方「少年」たち：入米中継地・出米活動地としてのメキシコ』、坂野鉄也（著）、Faculty of Economics Shiga University、2025年9月
- 『現代ブラジル論：激動の世界で高まる存在感』、堀坂浩太郎、子安昭子、竹下幸治郎（共著）、Sophia University Press 上智大学出版 ぎょうせい、2025年9月
- 『海外豆類事情調査報告書・2025 年（アルゼンチン共和国）』、日本豆類協会、2025年9月
- 『海外豆類事情調査報告書（アルゼンチン共和国）2025 年』、日本豆類協会（著）、日本豆類協会、2025年9月

- 『海外豆類事情調査報告書』、日本豆類協会、2025 年 9 月
- 『ニューエクスプレス + スペイン語』、福嶋教隆（著）、白水社、2025 年 10 月
- 『自由で、明るく笑って過ごすスペイン流贅沢な暮らし = Live Free Shine Bright Laugh Often Luxury the Spanish Way』、Rita（著）、大和出版、2025 年 10 月
- 『ひとり歩くスペイン巡礼路 今そこだけに広がる世界：聖地サンティアゴへフランス人の道 800km の旅』、高橋克文（著）、青山ライフ出版 星雲社、2025 年 10 月
- 『移民がむすぶ日本と南米の歴史 = A HISTORY OF JAPAN AND SOUTH AMERICA CONNECTED BY MIGRATION：帝国・開発・官民協力』、ファクンド・ガラシーノ、高木佳奈（編）、東京大学出版会、2025 年 10 月
- 『サンティアゴ巡礼 780 キロの旅：71 歳歩いていても歩いてもなんの悟りも開けず - でも』、砂川博昭（著）、世界冒険社、2025 年 10 月
- 『ゼロから分かる！聴けば聴くほど、楽しくなるラテン音楽入門』、伊藤嘉章、岡本郁生（監修）、世界文化社、2025 年 10 月
- 『メディアとメキシコ：公共空間とマスメディアが伝えるもの』、岡田敦美（著）、早稲田大学出版部、2025 年 10 月
- 『アントニ・ガウディ：サグラダ・ファミリアを生んだ建築家』、山本まさみ（文）、辰羽、世望希ユキ、カリリロ（絵）、鳥居徳敏（監修）、Gakken、2025 年 10 月
- 『はじめてのメスカルの教科書 = THE BEGINNER'S GUIDE TO Mezcal』、目時裕美（著）、誠文堂新光社、2025 年 10 月
- 『グアヤキ年代記：遊動狩人アチェの世界』、ピエール・クラストル（著）、毬藻充（訳）、筑摩書房、2025 年 10 月
- 『まいにちふれるスペイン語手帳 2026』、スペイン語教室 ADELANTE（監修）、白水社編集部（編）、白水社、2025 年 10 月
- 『秘儀』上下、マリアーナ・エンリケス（著）、宮崎夏紀（訳）、新潮文庫、2025 年 10 月
- 『現代ラテンアメリカ政治』、村上勇介、出岡直也、山岡加奈子（編）、法律文化社、2025 年 11 月
- 『一神教のラテンアメリカ：ユダヤ教・キリスト教・イスラム教をめぐって』、乗浩子（著）、新評論、2025 年 11 月
- 『三浦按針は英国通商成立までの十三年間、何をしていたのか：スペイン史料より』、鈴木かほる（著）、文芸社、2025 年 11 月
- 『ハプスブルクの文化を知るための 71 章』、川成洋（編著）、明石書店、2025 年 11 月
- 『バスク料理入門 = La Cocina Vasca：世界が憧れる美食の街サン・セバスティアン発』、中武亮（著）、世界文化社、2025 年 11 月
- 『ブラジル移民と五七五：ブラジル国際俳句のトランスカルチュラルな展開』、白石佳和（著）、春風社、2025 年 11 月
- 『マヤの赤い月』、宮西照夫（著）、遠見書房、2025 年 11 月

- 『海外邦字新聞能楽記事集成・ブラジル・ハワイ編』、佐藤和道（編集）、[佐藤和道]、2025 年 11 月
- 『海外邦字新聞能楽記事集成』、編集佐藤和道（著）、[佐藤和道]、2025 年 11 月
- 『一人娘』、グアダルーペ・ネットル（著）、宇野和美（訳）、現代書館、2025 年 11 月
- 『瞬間スペイン語作文 1：はじめての 1000 フレーズ』、善真書房、Independently Published、2025 年 11 月
- 『瞬間スペイン語作文 2：はじめての 1000 フレーズ』、善真書房、Independently Published、2025 年 11 月
- 『フェアトレード原論：ラテンアメリカから問い直す』、山本純一（著）、明石書店、2025 年 12 月
- 『Eden：スペイン巡礼 800km の道』、佐藤季敦（著）、虹色社、2025 年 12 月
- 『南欧を旅するレシポノート：ポルトガル、スペイン、フランス、イタリア』、上田淳子（著）、ナツメ社、2025 年 12 月
- 『「再征服」は、なぜ八百年かかったのか：レコンキスタ』、黒田祐我（著）、NHK 出版、2025 年 12 月
- 『民族植物学入門：アンデスからヒマラヤへ』、山本紀夫（編著）、京都大学学術出版会、2025 年 12 月
- 『地図でスッと頭に入るブラジル』、アンジェロ・イシ（監修）、昭文社、2025 年 12 月
- 『ガリンペイロ』、国分拓（著）、新潮社、2025 年 12 月
- 『『ドン・キホーテ』とともに』、京都セルバンテス懇話会（編）、片倉充造、佐竹謙一（編集委員）、行路社、2025 年 12 月
- 『沈黙をあなたに』マリオ・バルガス＝リョサ（著）、柳原孝敦（訳）、集英社、2025 年 12 月
- 『ガブリエル・ガルシア・マルケス：ラテンアメリカ文学と魔術的リアリズムの結合』、寺尾隆吉（著）、水声社、2026 年 1 月
- 『スペイン語の入門』、瓜谷良平、瓜谷望（著）、白水社、2026 年 1 月
- 『はじめてのスペイン語』、中野久夫（著）、明日香出版社、2026 年 1 月
- 『海外諸国の電気事業：スペイン王国・2026 年』、海外電力調査会（編集）、海外電力調査会、2026 年 1 月
- 『ベネズエラ情勢のトリセツ』、吉田朋之（著）、日本国際問題研究所、2026 年 1 月
- 『ゼロから話せるブラジル・ポルトガル語：会話中心』、浜岡究（著）、三修社、2026 年 1 月
- 『現代ラテンアメリカ社会を知るための 47 章』、石田智恵、林みどり（編著）、明石書店、2026 年 2 月
- 『カタストロフの残響：ラテンアメリカの政治的暴力と日常』、石田智恵（編）、春風社、2026 年 2 月

- 『カリブの海賊船から大脱出：生死を決める 132 の分かれ道：大航海サバイバル』、ジョー・ポッター 作、岡本由香子（訳）、ライツ社、2026 年 2 月
- 『日系・トランスナショナル起業家研究：ブラジル、メキシコ、日本の事例から』、横山和子、セーラ・ルーザー・バーチュリ（著）、文眞堂、2026 年 2 月
- 『アントニ・ガウディ：世界遺産を生んだ建築家』、鳥居徳敏（監修）、かわもとまい（まんが作画）、KADOKAWA、2026 年 2 月
- 『ニューエクスプレス＋バスク語』、吉田浩美（著）、白水社、2026 年 2 月
- 『ラテンアメリカへのお誘い＝An invitation to Latin America：社会を知り学んでみよう』、近田亮平（編）、日本貿易振興機構アジア経済研究所、2026 年 3 月
- 『たったの 72 パターンでこんなに話せるスペイン語会話』、欧米・アジア語学センター、フリオ・ルイス・ルイス（著）、明日香出版社、2026 年 3 月
- 『家庭で作れるスペイン料理：パエリア、タパスから地方料理まで』、丸山久美（著）、河出書房新社、2026 年 3 月
- 『絵で見る日常生活のスペイン語表現』、IBC パブリッシング編（著）、IBC パブリッシング、2026 年 3 月
- 『主要国の富くじ要覧・南米等編』、日本宝くじ協会（編集）、日本宝くじ協会、2026 年 3 月
- 『メキシコのナポレオンサンタ・アナの時代＝The Napoleon of Mexico: The Era of Santa Anna：米墨戦争を戦い抜いた首領』、牛島万（著）、明石書店、2026 年 3 月
- 『メキシコ市に取り込まれた先住民村落：慣習・調和・葛藤の動態』、禪野美帆（著）、関西学院大学出版会、2026 年 3 月
- 『Collections review on 23 silverworks labeled “Hopi” in the New Mexico State University Museum＝ニューメキシコ州立大学附属博物館収蔵 23 点の「ホピ製」銀細工資料熟覧』、Atsunori Ito and Fumiyasu Arakawa（編集）、人間文化研究機構国立民族学博物館、2026 年 3 月
- 『口が覚えるブラジルポルトガル語：スピーキング体得トレーニング』、高阪香津美（著）、三修社、2026 年 3 月
- 『スペイン史入門＝Introduction to Spanish History』、内村俊太、武藤祥（編）、昭和堂、2026 年 4 月
- 『観客という凄まじい怪物：スペイン・ハプスブルク時代の演劇世界』、佐竹謙一（著）、講談社、2026 年 4 月
- 『対照理論言語学を始めよう＝Introduction to Theoretical Contrastive Linguistics：言語機能の仕組みから探る日本語スペイン語対照研究』、片岡喜代子（著）、ひつじ書房、2026 年 4 月
- 『クラウン西和辞典＝CROWN DICCIONARIO ESPAÑOL-JAPONÉS』、寺崎英樹、Enrique Contreras（編）、三省堂、2026 年 4 月

- 『新大陸の家族史：有力入植者と植民地の形成（メキシコ一五二八～一六二八）』、横山和加子（著）、三元社、2026 年 4 月
- 『アルパカ アンデスの民と生きる』、松井 章（写真）、Andina Publishing、2026 年 4 月
- 『パラグアイ、思い出の味、心にしみる香り：私の大好きな料理のレシピとその物語』、Miryan Megumi Kumagai（著）、誠文堂新光社、2026 年 4 月
- 『カエルのおよめさん：メキシコ・ミヘ族の民話』、清水たま子（文）、竹田鎮三郎（絵）、福音館書店、2026 年 4 月
- 『メキシコのバナキュラーな場所から II：Library iichiko;170』、阿波 弓夫（著）、山本哲士（編集）、オクタビオ・パス（著）、アイコ・モリヤ（著）、フアン・ホセ・サンティバニェス・サンチアゴ（著）、河北 秀也（監修）、文化科学高等研究院、2026 年 4 月
- 『ブラジルを斬る・起き上がりこぼしの 89 年』、齋藤健（著）、文芸社、2026 年 4 月
- 『10 のレッスンでわかる入門ブラジルポルトガル語 = Introdução ao português brasileiro em 10 lições』、拝野寿美子、グシケン ガブリエラ タミー、デナザレ フィゲイラ フラヴィオ（著）、スリーエーネットワーク、2026 年 4 月
- 『ヘロニモ・デ・パサモンテの苦難と生涯 贋作『ドン・キホーテ』の作者は誰か？』、ヘロニモ・デ・パサモンテ（著）、岩根罔和（訳）、彩流社、2026 年 4 月
- 『黄金の軍鶏』、フアン・ルルフォ（著）、杉山晃（訳）、国書刊行会、2026 年 4 月
- 『世界政治から語るラテンアメリカの歴史：植民地時代から今に続く歴史の重み』、渡邊利夫（著）、明石書店、2026 年 5 月
- 『日本を出よう！：スペインより愛を込めて』、天野修治（著）、文芸社、2026 年 5 月
- 『スペイン語の認知言語学：多面的かつ普遍的な認知言語学を目指して』、田林洋一（著）、開拓社、2026 年 5 月
- 『私という群島：今福龍太環カリブ海論集』、今福龍太（著）、福島亮（編）、平凡社、2026 年 5 月
- 『季刊民族学 196 特集 フィールドで読み解くラテンアメリカ文学』、安保寛尚（著）、藤井健太郎（著）、仁平ふくみ（著）、鋤柄史子（著）、安原瑛治（著）、新谷和輝（著）、山田美雪（著）、山辺弦（著）、棚瀬あずさ（著）、南映子（著）、川瀬慈（著）、千里文化財団、2026 年 5 月
- 『スペイン学第 28 号』、京都セルバンテス懇話会（編集）、論創社、2026 年 5 月
- 『ファリャ スペイン民謡組曲 ヴァイオリンとピアノのための』、パウル・コハンスキ（著）、株式会社全音楽譜出版社 全音楽譜出版社、2026 年 5 月
- 『危機のキューバ：崩れゆく「陽気な社会主義」』、平田健治（著）、明石書店、2026 年 5 月
- 『図解でスッと頭に入るガウディとサグラダ・ファミリアの世界』、鳥居 徳敏（監修）、昭文社 出版編集部（編集）、昭文社（株）昭文社、2026 年 5 月

【『HISPÁNICA』編集委員会より】

『HISPÁNICA』第71号の原稿を募集しています。詳細については、学会ホームページの機関紙投稿規程をご参照のうえ、投稿フォームよりご投稿ください。

【編集後記】

会報第33号をお届けいたします。ご執筆にご協力いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

今号では、ラテンアメリカの少数民族をテーマに、会員以外の専門家の方々からのご寄稿いただきました。そのほかにも、多様な切り口からのエッセイ、書評、著書紹介、学会・研究会の活動報告が集まり、大変充実した内容となりました。

地震や大雨などの自然災害が相次ぎ、心を痛め、不安を感じることの多い日々が続いております。このような日々の中で、本号がスペイン語圏の多様な言語、文化、社会、そしてそこに暮らす人々に思いを寄せ、新たなことを知り、考える小さなきっかけとなれば幸いです。

今後とも、皆様のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(広報委員長 村上 陽子)